じどうかんルネサンス

~子どもたちと共に歩むこれからの道~

第14回 全国児童館・ 児童クラブ大会

TOKYO

報告書



主催:一般財団法人 児童健全育成推進財団、公益財団法人 児童育成協会、全国児童厚生員研究協議会 主管:第14回全国児童館・児童クラブ大会 TOKYO 実行委員会

もくじ

大会概要
大会日程
オープニングアクト
開会セレモニー 4
キーノートスピーチ (基調提起) 6
特別分科会10
分科会14
全国児童館王決定戦のご紹介22
分科会24
視察分科会46
閉会セレモニー51
交流会53
第2部 児童館・児童クラブフェスタ 遊びの城55
開催までの経過59
企画運営委員名簿61
掲載記事62



【開催趣旨】 全国の児童館・放課後児童クラブや子ども・子育て支援等の関係者が一堂に会し、子どもの育ちや子育ての現状を共有するとともに、児童の健全育成の推進に資する人的ネットワークの構築を目的に開催します。

各自治体において放課後児童対策や子育て支援事業が多様化し、児童館の見直 しや再編の動きもある中で、あらためて子どもの居場所や遊びなどについて研 究協議をおこない、これからの子ども・子育て支援のあり方を展望します。

- 【開催日】平成27年1月24日(土)~25日(日)
- 【会 場】 国立総合児童センターこどもの城、青山劇場、青山円形劇場
- 【参加者】第1部 児童館・放課後児童クラブ職員、行政担当者、研究者等760名 第2部 第1部参加者、一般市民4,107名
- 【参加費】2,500円/当日参加3,000円
- 【主 催】一般財団法人 児童健全育成推進財団、公益財団法人 児童育成協会、 全国児童厚生員研究協議会
- 【後 援】厚生労働省、東京都、社会福祉法人 全国社会福祉協議会、 一般財団法人 こども未来財団、児童厚生員養成課程連絡協議会、 全国地域活動連絡協議会、民間児童館ネットワーク

【第2部 遊びの城 協力団体】

東京都児童相談センター児童館支援係、新宿区高田馬場第一児童館、文京区立本駒込南児童館、台東区社会福祉事業団児童館、北区立児童館、荒川区立ひろば館・学童クラブ、八王子市立児童館、東京都児童館等連絡協議会第3ブロック(大田・品川・目黒・世田谷区)、中野区児童館+キッズプラザ、板橋区立児童館盛り上げ隊、東京都児童館等連絡協議会第5ブロック(足立・江東・葛飾・墨田区)、福生市児童館、多摩市児童館・学童クラブ職員ボランティアグループ、杉並区高井戸児童館、杉並区児童青少年センターゆう杉並、杉並区堀ノ内東児童館+成田西児童館+ユースプロジェクト、文京区 b-lab、豊島区ジャンプ東池袋、ジャンプ長崎、江戸川区共育プラザ小岩、共育プラザー之江、共育プラザ南篠崎、小金井市貫井南児童館+東児童館、調布市青少年ステーション CAPS、千葉市子ども交流館

大会日程

第1部 平成 27 年 1 月 24 日 (土)				
(受付 10:00~) 10:30	オープニングアクト 開会セレモニー	- 青山劇場		
11:15	キーノートスピーチ(基調提起)			
12:00	休憩・移動			
13:30	特別分科会 分科会 1 ~ 15 視察分科会 A ~ E	青山劇場		
		こどもの城		
		青山円形劇場		
		都内サテライト会場		
16:20~17:00	エンディングアクト 閉会セレモニー	青山劇場		
(受付 17:30 ~) 18:00	交流会	渋谷区内 3 会場		

第2部 平成27年1月25日(日)				
10:30 ~ 15:30	児童館・児童クラブフェスタ「遊びの城」	こどもの城 特設会場 (1F ピロティ 3F 青山円形劇場 8 ~ 10F 各室		



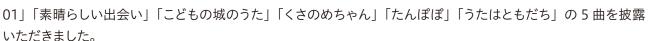
■ オープニングアクト

「子どもたちからのサウンドメッセージ」

出演:こどもの城児童合唱団 指導・指揮者:吉村 温子

こどもの城児童合唱団の元気な歌声が全国大会のオープニングを飾りました。

子どもたちが迫りで上がって来た時に会場は一気に引き込まれていきました。青山劇場の素晴らしい舞台で「ともだち



合唱団が公演や合宿で訪問し、つながってきた全国の児童館職員も一緒に舞台に上がり、感動的な幕開けとなりました。











プロフィール

1985年4月、「こどもの城」のオープン(同年11月)に先駆けて創設した児童合唱団。

子どもの「遊び」から生まれる創造的自己表現活動を重視し、音楽を通して協調性・創造性等、幅広い知的好奇心を養い、豊かな人間性を育てることを目的に活動する。

現在、合唱講座・合唱団低学年・合唱団高学年・混声合唱団の4つのグループ約290名の団員で構成される。合唱練習に加えて、身体表現活動、朗読劇等を取り入れた演劇活動、造形活動、ふれあいを大切にした野外活動、そしてシンセサイザーやリズム楽器による合奏等を織り込んだ、ユニークな総合的プログラムを展開している。

▋ 開会セレモニー

■開会宣言

全国児童厚生員研究協議会会長 千葉 雅人

■主催者挨拶(要旨)

公益財団法人 児童育成協会 理事長 藤田 興彦



皆様、こんにちは。本日はこどもの城へようこそおいでくださいました。こどもの城は、昭和60年国際児童年を記念して設置されました。国から運営を委託された私ども公益財団法人児童育成協会が、子どもたちの遊びのプログラムの開発や全国の児童館の支援、研修など、唯一の国立総合児童センターとして30年間さまざまな活動を続けてきました。しかし、平成24年、国は施設の老朽化や財政上の問題などの社会状況の変化から閉館を決定しました。

「動くこどもの城」事業は設立以来、全国800の児童館等に伺い50万人の方々の参加を得て交流させていただきました。また、東日本大震災をきっかけに始まりました「児童館こいのぼりがいっぱいプロジェクト」はこどもの城から全国への呼びかけに300以上の児童館が賛同していただき、全国規模での連帯感を育む事業へと発展しました。全国の児童館・児童クラブの皆

様、「国立総合児童センターこどもの城」への30年にわたるご厚情に感謝申し上げます。

こどもの城の終幕に全国大会を開催することができて、児童館の方々と一堂に集えたことは大きな喜びです。 全国の児童館・児童クラブの益々のご発展をお祈り致します。

一般財団法人 児童健全育成推進財団 理事長 鈴木 一光



全国大会第1回は、平成7年東京からスタートしました。児童厚生員が手 弁当で500円を持って集まったのがきっかけでした。今大会のテーマには「ル ネサンス(Renaissance)」という言葉を取り上げました。

ールネサンスとは何か。疑う事を許さなかった教会の圧政に対して、見たい、知りたい、分りたいという欲望の爆発が、後世の人々によってルネサンスと名付けられた精神運動の本質でした。ダンテは「考えているだけではだめで、表現してはじめて『知識』『理解』の有効な『手段』である」と書き残しています。

想えば私達、児童厚生員はこの爆発を作品に結晶させることに非力でした。 子どもが健全に発達する上で「遊ぶ」ことの重要性を、科学的根拠を通し て世間に納得してもらえていません。健全育成の目的は「弱者を救済する強 者を育てること」である、という日常的意味の説明も怠ってきました。

児童福祉法は子どもを保護するだけではなく発達を支援することが大切で

す。子育て支援だけが児童福祉法の趣旨ではありません。児童館の存在価値を新たな根拠をもって示していく、 それが大会の趣旨です。

大会の開催にあたり、厚生労働省、東京都児童館等連絡協議会、公益財団法人児童育成協会に多大なご協力を賜わりました。このことを皆さんにお伝えし、実り多き大会となりますことを祈念して、開会のご挨拶とさせていただきます。



■来 賓 祝 辞(要旨)

厚生労働省雇用均等・児童 家庭局育成環境課 課長 為石 摩利夫 様



第 14 回全国大会の開催おめでとうございます。また、日ごろから児童健全育成にご尽力いただいている皆様方に対しまして、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

さて、子どもを取り巻く環境が変化しています。子どもの遊びが個別化していて、人と顔を合わせないで会話できる時代になっています。これが子どもの成長にどのような影響を与えるのか、心配されるところです。また、地域の支え合いの関係がなくなって子育ての孤立化が社会全体の課題になっています。

こうした状況のなか、27年4月から子ども・子育て支援新制度が施行され、市町村は保育・教育・子育て支援の視点から、地域で子ども・子育て支援を計画的に進めていくこととなっており、放課後児童クラブもその中で一定の水準を持った事業として「量」と「質」の両面から整備を進めていくこととしています。このため、平成27年度から放課後児童支援員の認定資格研修も

スタートすることとなっています。

一方、地域には子どもを支援する施設として児童館があります。児童館は地域の健全育成の拠点であり、子ども・子育て支援新制度と相まって益々、地域で重要な役割を担っていくことになると認識しています。本大会の会場である「こどもの城」は閉館しますが、その蓄積した遊びのノウハウを基盤として、皆さまにご協力を頂きながら、直接、国において何らかの形で継承していく予定でおりますので、今後ともご支援いただきたいと思っております。本大会で、子どものために新たな視点、技術の習得に努めていただきますことをお願いしまして、私のご挨拶といたします。

東京都福祉保健局専門理事 東京都児童相談センター所長 **桜山 豊夫** 様



本日、第14回全国児童館・児童クラブ大会が開催され、誠におめでとうございます。

皆様、東京にようこそお越しくださいました。主催地の東京都を代表して 心から歓迎いたします。

児童館は全国に 4,600 か所以上あり、そのうち 600 以上の児童館が東京都内に設置されております。この児童館職員の横断的な組織として東京都児童館等連絡協議会がございます。今年度は全国児童館・児童クラブ大会の開催のために、新たに企画運営委員を選出していただきました。

実行委員会の皆様方、並びに児童健全育成推進財団、児童育成協会、全国児童厚生員研究協議会の皆様に厚く御礼申し上げます。課題への分析、成功事例などを発表し、情報を共有することで専門性を高め、子どもや子育て支援への知恵として地元に持ち帰り実践していただければと思います。

この大会での出会いが、全国の児童館職員の間でのネットワークをより強

固なものとするとともに、子どもが育つと同じように職員の皆様の専門性をより高めていただく有意義な場となることを祈念して私からのご挨拶といたします。

■来 賓 紹 介

東京都児童館等連絡協議会会長 東京都児童相談センター事業課長 竹中 雪与

開会セレモニーは、オープニングアクトに含まれる形にし、こどもの城児童合唱団の子どもたちが司会進行をしました。

■ キーノートスピーチ(基調提起)

児童館・児童クラブの現状と課題 について、全国の児童健全育成指導 士14名より提起し、各分科会での 協議にいかすキーワードを共有しまし た。発表趣旨をご紹介します。



司会:山田恭平さん(墨田区:八広はなみずき児童館)

佐渡加奈子さん(豊島区:中高生センタージャンプ東池袋)



児童健全育成指導士とは

一般財団法人 児童健全育成推進財団が認定する児童厚生員資格制度の最上位にあり、児童健全育成や 子育て支援など児童福祉事業に精通するスーパーバイザーとして、経験に裏付けられた専門的な理論と 実践を構築する職員のための資格です。児童にかかわる行政施策等に参画・関与するなど、児童館・放 課後児童クラブの発展に寄与するオーガナイザーとして活躍されています。

●子どもの参画

公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会 こども事業部長(北海道) 寺田 陽子

札幌では全館に子ども運営委員会を設置し、運営に参画する など自主的な活動を行っています。子どもの声に耳を傾け、持っている力を引き出すことが大切です。



●ソーシャルワークカ

中標津町子育て支援室 室長(北海道)

高松 絵里子

児童虐待が児童館と向き合うきっかけでした。子どもたちがありのままの姿で過ごせる場所での支援のあり方が大切になっています。



●放課後の子ども

上三川町立北小学校 校長(栃木県)

柳澤 邦夫

放課後の時間がなくなってきている。豊かな放課後を支える児 童館・児童クラブがガイドラインや放課後子ども総合プランに 基づきながら、役割を果たす必要があります。



●中高生への対応力

港区麻布子ども中高生プラザ 所長(東京都)

佐野 真一

中高生対応施設が増えてきました。しかし、彼らの人間関係は 狭いものになっているかもしれない。ハード、プログラムだけ でなく、職員のスタンスが重要になっています。



●多彩な協働

八王子市立中野児童館 児童館長(東京都) 井垣 利朗

ボランティア、地域住民と児童館が協働する機会や、学校など との連携機会が増えました。児童館職員の地域でのネットワーク力がポイントになっています。



●児童館のエビデンス

鎌倉女子大学 非常勤講師 豊倉 厚

エビデンス (根拠・証拠) を探っています。児童館の存在価値は共通の子ども観が根づいていること。子どものありのままを受け止める児童厚生員の存在が大事です。



●異世代をつなぐ

浅野町児童館 児童厚生員(石川県)

三浦 啓子

異世代や伝統からの学びが大事です。地域をつないでいくために、利用者を真ん中に置き、地域にある文化の継承や異世代からの学びを続けていきましょう。



●子どもの遊びの復権

福井県児童科学館 児童厚生員 小林 加奈子

少子高齢化で子どもの遊びの原風景が失われつつあります。福井での児童館大会では、遊びの重要性を改めて考えました。 遊びを守っていきましょう。



■マネジメント

京都市北白川児童館館長中川一良

マネジメント(経営・管理)が重要になっています。行政とのパートナーシップやコンプライアンスも含めて、児童館が最大限の効果を発揮するためにも改めて身につけましょう。



●スタッフの次世代育成

京都市城南児童館 館長 丸岡 敦子

職員が育っていないと子どもたちの育ちが実現できません。どのような職員が必要とされているかを見極め、育てていく必要があります。



●広報・発信力

ももやま児童館 館長(京都市) 波多野 里美

児童館・児童クラブは世間に知られているようで、知られてない。発信する言葉に信念が込められていますでしょうか。伝えなくては勿体ないです。



●子どもの命を守る

神戸市東灘区社会福祉協議会 主幹(子育てコーディネーター) 古田 説子

阪神・淡路大震災から 20 年。子どもを狙う犯罪が続いています。防災・減災、防犯を遊びを通して身につけ、地域と共に緊急時対策をしていきましょう。





●子育ての主体性アップ

みどり町児童センター 館長 (沖縄県)

山城 康代

子育て支援事業で保護者の主体的な運営が難しい。弱さを支える絆づくりが必要となっていると考えます。弱さ・つらさを共有できるような場づくりが大事になっています。



●じどうかんルネサンス

中野区北原児童館 館長(東京都)

千葉 雅人

エビデンスを考える中で、 $0\sim18$ 歳未満を切れ目無く支援できることは児童館の最大の特長ではないかと思います。ガイドラインなどでも指摘されている地域に必要とされる施設づくりがルネサンスにつながるのではないでしょうか。



■特別分科会

子どもの貧困を考える

いま、日本の子どもは、6人に1人が貧困状態にあります。子ども時代の貧困は、健康や学力はもとより、友人関係や自尊感情にも影響を及ぼし、成人後もその境遇から抜け出すのは困難であると言われています。特別分科会では、子どもの貧困について学びました。



●講師

阿部 彩_{先生}(国立社会保障・人口問題研究所 社会保障応用分析研究部部長)

マサチューセッツ工科大学卒業後、タフツ大学フレッチャー法律外交大学院にて修士号・博士号取得。その後、国際連合、海外経済協力基金を経て、1999年より国立社会保障・人口問題研究所へ。現在は同研究所社会保障応用分析研究部部長。ご専門は、貧困、社会的排除、社会保障、生活保護。著書は、『子どもの貧困・日本の不公平を考える』(岩波書店、2008年)、『弱者の居場所がない社会』(講談社、2011年)、『子どもの貧困Ⅱ・解決策を考える』(岩波書店、2014年)、他。

みなさんこんにちは。国立社会保障・人口問題研究所 の阿部と申します。今日は、私がこれまで研究を重ねてきた 「子どもの貧困」の現状をご紹介したいと思っております。

実は私は、小学5年生の双子の男の子の母でございます。今日の午前中は学校参観の予定が入っていたのですが、昨夜一人が熱を出しまして、朝から病院に行ったり学校に行ったりと、てんやわんやの状況で駆けつけて参りました。(笑)

我が家は、1年生から3年生までの間、放課後児童クラブにお世話になりました。4年生になってからは、毎日のように児童館に入り浸っています。2つ目の家みたいに、おじいちゃん、おばあちゃんの家のように楽しみ、お世話になっております。地域に子どもが過ごせる場所が家庭や学校以外にもあるということは、フルタイムで働いている私にとっては特に、とてもありがたいことです。そういった場でお仕事をされているみなさまには本当に頭が下がる思いでおりまして、今日はこんな高い檀上からレクチャーをするような形で申し訳ないという気持ちもございますが、いくつかのデータをお示ししながら子どもの貧困の問題について考えていきたいと思っております。

分科会内容

1. 子どもの貧困の現状

■ 80 年代半ばからすでに

このグラフは、厚生労働省が公式に発表している日本の相対的貧困率です。上のグラフが社会全体。下が子どもです。2012年、子どもの貧困率は史上初めて社会全体の貧困率を上回りました。とても深刻な状況です。16.3%というのは、6~7人に1人が貧困であるということです。

日本の相対的貧困率 (厚労省の公式発表)



子どもの定義は18歳未満

2006年から2009年にかけては、子どもの貧困率の伸びが大きかった 2012年は、初めて、子どもの貧困率が相対的貧困率を上回った

リーマンショックが 2008 年、派遣村が 2008 年の暮れ からお正月にかけてですから、子どもの貧困は、2009 年、2010 年以降の新しい問題だと思っている方もたくさんいます。しかし、このグラフからもわかるように、1985 年には子どもの貧困率はすでに 10.9% に達していました。今よりは少ないですけど、決して珍しかったわけではありません。ただ、当時はバブル崩壊の頃で、誰も日本に貧困があるとは考えていませんでしたし、格差についてはまったく認識されていませんでした。日本は平等な国で、みんなが中流であると信じられていたのです。

■先進国では「相対的貧困」

ただそうはいっても「私の周りには貧困の子なんていないよ」とおっしゃる方も多いと思います。でもそれは、貧困のイメージが違います。ここで私たちが使っているのは「相対的貧困」です。相対的貧困というのは、例えば、家がなくてストリートチルドレンになるようなお子さんのことではありません。日本の社会の中で標準的な生活ができない状

ALL TOKYO >>>> ALL JAPAN

況を言います。毎日、靴を履いて、服を着て、お風呂に入って、ランドセルを背負って学校に行く…といったような生活ですね。これらはどこを取っても、例えばランドセルがなくても、お風呂に入れなくても、生きていくことはできます。けれども、そのような状態で今の日本の社会で何の影響もなく育っていけるかというと、…やはりそれはできません。普通の生活ができないということは、子どもの成長を大きく阻害するのです。そういう意味で、いま先進諸国で使われているのが「相対的貧困」なのです。日本の場合、所得で見ますと、2人世帯だと大体年間の所得が170万円以下、4人の核家族であれば250万円以下がこれにあたります。

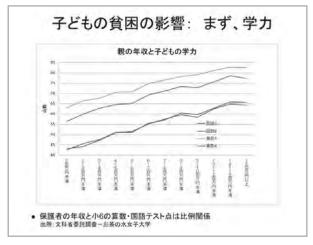
■母子家庭が主な原因ではない

貧困率の話をすると多くの方が「それは、母子世帯の子どもが増えているからでしょう」とおっしゃいます。確かに、ひとり親世帯は半数以上が貧困状態にあります。けれども、ひとり親世帯は全体の中では少なく、またそれほど増加もしていません。

近年の子どもの貧困率上昇の原因は「夫婦と未婚子のみ」の世帯、普通の核家族なのです。いま、この世帯が全体の7割を占めようとしています。そして、ここの貧困率がジリジリと上がってきているのが、実は一番大きく影響しているのです。

2. 貧困の子どもの育ちへの影響

■親の年収で決まる子どもの学力



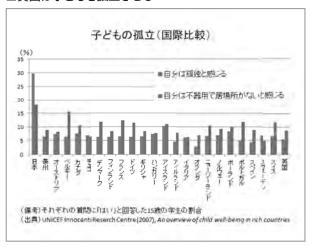
では、こうした状況は子どもの育ちにどう影響するので しょうか。子どもの学力を親の年収別に見ると本当にきれ いに層ができます。今の日本では子どもの学力は、ほぼ親 の年収で決まるということが分かります。

もっとショッキングなデータがあります。よく、「貧困のハンディを持つなら、努力でカバーしなさいって」言われますよね。ですけど、貧困家庭の子が1日3時間以上勉強するという努力をしても、全然努力しないお金持ちの子どもにかなわないという調査結果があるんです。それぐらい家庭環境と学力というのは大きく影響し合っているんですね。本当に悲しい気持ちがします。

■貧困は子どもの健康にも影響する

健康面を見ますと、所得階層が低いほど健康状態が悪いということが分かっています。子ども期に貧困であることは、健康状態や体質(肥満など)に影響します。それは当然、大人になってからの健康状態や体質に影響し、十分に働くことができず、貧困の連鎖を招くことにもつながっていきます。いま日本の大人は、所得が低ければ低いほど健康状態が悪く、肥満が多いんです。また、うつ病などの精神の病を患っている方も多くいらっしゃいます。

■貧困は子どもを孤立させる



貧困層の子どもは不登校になる確率も非行に走る確率も高いことが調査で示されています。子どもの孤立に着目した国際比較データを見ると、「自分は孤独と感じますか」「自分は不器用で居場所がないと感じますか」という質問に「はい」と回答した15歳の学生の割合は、日本は先進諸国の他の国に比べて圧倒的に高い数値を示しています。

また、小学 5 年生に「平日の放課後に誰と一緒に過ごしますか」と聞いた調査では、「所得が低くなるほど家族と過ごす割合が少なく、また、家族以外の大人(塾や習い事の先生、サッカーや野球のコーチなど)と過ごす割合も少なくなる。友だちと過ごす割合は増えるが、一人で過ごす子どもも多くなる」ということが明らかになっています。

この傾向は、中学2年生への調査ではより顕著になります。一番心配なのは一人でいる時間です。低所得層は12%が「一人でいる」と答えています。そして、友達と過ごす割合も少なくなっています。こういうところから、孤立の問題が発生してくるのです。

日本では、小学校の高学年になったら、もう国の政策として何もしなくていいというような雰囲気がすごく見て取れるんですね。アメリカでは子どもを家に放置するのは犯罪で、誰かをつけなければいけないという法律があったりします。ですけど日本では、あまり心配にならない年齢になれば別に放っておいてもいいんじゃないのと考えることのほうが多くあります。でも実はこういった孤立した子どもから、引きこもりですとか不登校ですとか、いろいろな問題が起こってくるのです。子どもの居場所づくりは実は、年齢の高



い子どもにとっても、 非常に重要なことな のです。

■貧困は自己肯定感 にも影響する

「頑張れば報われると思わない」小学5年生は、非貧困層では4%のところ、

貧困層では8%と、約2倍の数値が出ています。「自分は価値のある人間だと思わない」小学校5年生は、非貧困層でも14%と高いんですけれども、貧困層では20%に及ぶんですね。5人に1人です。中学校2年生になると「自分は価値がある人間だと思わない」のは、非貧困層では17%で、貧困層では25%です。子どもがこのように感じてしまう世の中をつくっているということに対して、大人はもっと危機感を感じる必要があります。

■社会的排除

貧困が経済的に満たされていない状況を言うのに対して、社会的排除は人間関係や社会システムから排除されている状況を言います。ヨーロッパでは「貧困すなわち社会的排除」というようにセットの言葉になっています。

若くして社会的排除に至ってしまった53件の事例についてケース・スタディーを行った調査があります。高校中退、ホームレス、生活保護受給、(10代で妊娠したような)シングルマザー、薬物・アルコール依存、自殺というようなさまざまなケースについて、どのようなライフコースを歩いてきたのかを見てみました。今までこういった問題はそれぞれ別々の専門機関が対応していました。ですけど社会的排除という視点で見ると、共通点がたくさん見えてきたのです。

彼らの多くは発達障害・知的障害がありましたが、軽度であったため見過ごされてしまいました。多くが貧困家庭で、ひとり親世帯や親がいない世帯もありました。児童虐待や家庭内暴力、それから親御さん自身が知的障害を抱えていることもありました。学校では、いじめ、不登校、ひきこもり等の経験がありました。成人以降には、ほとんどすべての方に精神疾患がありましたし、職場では、リストラや解雇、いじめ、そして、風俗関連の産業などがありました。生活環境としては、援助交際、結婚の失敗、配偶者からの DV、親との断絶、借金といったような問題がございました。

恐らく、こうした問題を抱えたお子さんというのは、潜在的にたくさんいて、それがいつしか社会的排除として出てくるのでしょうね。できるだけ早い時点で、「これはリスクだからこの子はずっとフォローしてやらなければいけないんだ」という視点で私たち大人社会が対処していれば、恐らくこのお子さんたちはこのような社会的排除の状況に陥らなかったはずです。ですから、そのようなことをキャッチ

できる場をもっともっと作っていかなければいけない。児 童館や放課後児童クラブはそういう役割を担っていく必要 があるのだろうなと思っております。

3. 子どもの貧困への対策

■緊急に生活の支援を

最後に対策についてお話させて頂きます。2012 年 6 月、「子どもの貧困対策の推進に関する法律」ができました。第 3 条に「国は、・・・・子どもの貧困対策を総合的に策定し、及び実施する責務を有する」と記されています。貧困に対して国が責任をもって取組むとはじめて明記されたものです。実際に何をするかが示されたのが、2014 年 8 月の「子どもの貧困対策に関する大綱」ですが、それほど新しい政策は盛り込まれていません。4 つのことをしなければならないと書いてあり、『教育の支援』の最初に「学校を子どもの貧困対策のプラットフォームとして位置づける」と書かれています。今まで及び腰だった文部科学省が貧困対策を教育施策に位置づけたわけで、これは評価できると思います。実際に「スクールソーシャルワーカーの配置」についてはお金がつき、各地で増員されています。

ただ、他の『生活の支援』『保護者に対する就労支援』『経済的支援』は、今までやってきた以上のことはほとんどありません。つまり、子どもの貧困対策として新しくお金をつぎ込むところは、実際はまだできないのが現実なのです。

■地域でできる貧困対策もある

では貧困削減に向けて何をすべきか。子どもの貧困対策は子どもの年齢が小さければ小さいほど効果があります。

アメリカではさまざまな実験プログラムが行われています。「ペリースクール」というのは3歳から5歳の間、週5日間、子どもに対する2時間半の保育プログラムに加えて、週1回90分の家庭訪問、親へのカウンセリング、福祉的なサポート等を実施していくものです。これは長期的に効果が認められるプログラムで、費用対効果は乳幼児プログラムで一番高く、プログラムにかかる経費が一人あたり\$15,700。それに対して生涯所得が\$60,000増加。費用対効果としては\$1,000投入したら\$3,822のお金が返って来ますよということなので、約4倍の効果があることになります。

「キャリア・アカデミー」は高校生に対する職業訓練です。自分が将来どんな仕事に就くのか意識させ、どういうふうにキャリアプランニングするのか講習してくれるプログラムです。費用は \$2,800。生涯所得は \$49,712 上がり、費用対効果は \$17,754。非常に高いです。同様に、私が今注目してるのが、「ビッグブラザー・ビッグシスター」。費用対効果は \$4,761 と非常に高いプログラムです。これは、貧困の子ども一人に対して、ボランティアのおとな一人をペアにするんです。そして、そのボランティアが定期的にその子と会って、キャッチボールしたり、映画を観に行ったり、アイスクリームを一緒に食べたりというようなことを、月1



回、やっていくものなんですね。貧困層の子どもの多くは 親に構ってもらえません。ですから、その代わりになってあ げるんです。子どもにとっては、自分のことを心配してくれて、 相談にも乗ってくれる存在ができる。それだけのことなんで すけど、不登校の率が減ったり、非行に走る率が減ったり、 ちゃんと就職する率が上がったりといったような効果が見 られます。このプログラムは日本でもできるのではないで しょうか。

■伝えて欲しい

最後に、私の話を90分間も聞いてくださったみなさんに申し上げたいのは、今日、もし少しでも共感するところがあったのなら、それをいろんな人に伝えて欲しいということです。「子どもの貧困、大変な問題だね」「何とかしなきゃいけないね」って言う人が少しでも増えれば、それは政治家にも伝わりますし、何とか変わっていくことができるのではないかなと思います。長い時間、どうもありがとうございました。

情報提供・質問

- ・京都市の児童館長をしています。日々、貧困家庭とその 児童に対応しております。まさに、ビッグブラザーやビッ グシスターのような役割を果たしているのだなと思いま す。自分のことを本気で心配してくれるおとなが地域にい るということは、生きづらさを抱える子どもにとって大き な支えとなります。
- ・岐阜市の児童センター長をしています。いま、だいたい 常連の3分の1の子が貧困家庭の子ではないでしょう か。児童館は、学習塾も習い事もスポーツクラブも行け ない子たちにとって、無料で1年中過ごせる場です。最 近は、居場所というより避難所、シェルターというような 意味合いすら持ち始めています。
- ・品川区でプレイパークの活動をしています。貧困家庭の子どもたちへの夕食の提供が必要だろうなと考えています。児童館というより、もっと小さい NPO の役割なのかなと思っています。
- ・沖縄県うるま市の児童館長です。沖縄は離婚率が高くて、 一人親もとても多い状況です。日本はどうして、一人親 家庭が多いのでしょうか?
- ・ヨーロッパでは貧困の話になると移民の問題が出てくると 思いますが、日本国内で、日本人と非日本人の貧困率に 関する統計はあるのでしょうか?

阿部先生のコメント

外国籍の方の貧困率ですが、日本の公的統計調査では 人種を聞くのがご法度なんです。国籍を取れないんですね。 貧困率等も別々に集計したものはありません。

食の話が出ました。食事は非常に有効な手段です。児 童館や放課後児童クラブには、長期休み期間中の食事を 考えて頂きたいなと思います。夏休みが終わると痩せてし まう子がいるんですね。是非、全国的に取り組んで欲しいです。

母子家庭がなぜ多いのかという質問がありましたが、日本では一人親家庭は圧倒的に少数です。けれども貧困率は高い。その理由は、1つ目は、男女の雇用格差が非常に大きいこと。男性が主な働き手で、女性はパートという意識がまだまだ私たちの社会に根強くあります。2つ目は、一人親家庭を支援するための政府からの支出が少ないこと。児童扶養手当などもありますけど、決して潤沢に出ているわけではありません。3つ目は、他の国に比べて、別れた夫が養育費を支払う率が圧倒的に少ないこと。以上3つ、少なくとも大きな要因があります。

時間となりました。残念ながら、世間のほとんどの人は、子どもの貧困なんて特段問題だと思っていないのが現状です。しかし、みなさんは子どもたちの状況を目の当たりにしているはずです。是非、その子どもたちの代弁者として、「こんな子どもがいるんだよ」ということをどんどん発信していって頂ければと思います。ありがとうございました。(終了)

参加者数 150人

参加者の感想

- ・岐阜市の児童館長さんが、児童館はいまや、子どもたち にとって居場所というより避難所だとおっしゃっていたの が印象的でした。
- ・食のプログラム、学習支援、そして、貧困家庭の子も含めた分け隔てない仲間づくりと、まだまだ児童館がやれることはたくさんある!
- ・経費が掛からず効果が高い、ビッグブラザー・ビッグシスターという米国での実践に興味をもちました。日本の児童館でも形を変えて何かできるのではないでしょうか。

担当者感想

阿部先生のお話は明快で、そして、心に響くものでした。 データに基づくお話でしたが、貧困問題に対する先生の熱 い思いがヒシと伝わってくるご講演でした。

阿部先生は児童館の役割や意義はもちろん、児童館職員のこともよく承知してくださっていて、私たちにとても好意を寄せてくださっていました。子育てとお仕事で非常にお忙しい中、また前日の晩、お子さんの1人がインフルエンザを発症するという大変な状況の中、ご講演とその後の質疑応答までおつき合い頂きました。ありがとうございました。

先生にお話いただいた日本の「子どもの貧困」の状況は 衝撃でした。児童館としてもやれることがまだまだあるとい うことが分かりましたし、もっともっと発信していく必要が あると思いを新たにしました。

●担当 野澤秀之(一般財団法人 児童健全育成推進財団)

子どもの放課後が変わる? ~放課後子ども総合プランを検証する~

「放課後子ども総合プラン」では、「一体型を中心とした放課後児童クラブおよび放課後子供教室の整備を進める」としています。このことにより、子どもの放課後の遊びや生活、さらに児童館や児童クラブへの影響はどうなるのか、子どもの視点から考えてみました。

分科会内容

1. 放課後子ども総合プランの現状報告

(以下、「プラン」)

東京の現況について、江戸川区、品川区、世田谷区、 中野区の各区役所ホームページから抜粋・編集した資料 を基に担当者が報告しました。

次に、プランの運営に関わっている2名の方から、お話 をしていただきました。

[1] 板橋区「あいキッズ」から

来年度から、学童クラブと全児童対策事業が一体化した新あいキッズが始まります。子どもたちの生活が大きく変わる点は2つです。学童クラブのおやつが午後5時に提供されることと、子どもたちにとって両事業の隔たりがなくなることです。一体化になることで、保育の要素がなくならないか、また、職員数が減少する中で、不特定多数の子への対応になり、一人一人の子ども達に寄り添えるのかなど、職員側にとまどいや不安があります。新しい制度が実態に合わせて、検討されながら進んでいってほしいと願っています。

[2] 相模原市「さがみっ子クラブ」から

さがみっ子クラブを利用している子どもからは「ランドセルを背負って来れて楽」、「校庭でサッカーができて楽しい」。保護者からは「安全安心」、「子どもがゲーム三昧にならなくていい」との声があがっています。放課後子どもプランはこのように、小さい児童館の役割を果たしています。ただ、本来子どもたちには、放課後は大人の目のない所で遊びたい欲求があると思います。学校の中で何ができるかを考え、地域に私たちの思いを伝えていくことが大切だと思います。地域との連携や協働を模索していきたいです。

2. キーワードの抽出

お二人の話から抽出した視点と運営担当者が事前に用意した視点、合わせて 23 個のキーワードを貼り出しました。参加者一人につき 3 枚の「いいね!シール」をグループ討議で話し合いたいキーワードに貼ってもらった所、以下の4つが上位に選ばれました。●子どもが地域で育つこと●放課後子ども教室・放課後児童クラブの共存●放課後の「学校化」●学校との関わり

3. グループ討議の概要

次に、「いいね!シール」によって選ばれたキーワード に沿って、6つのグループに分かれて討議の時間を持ちま した。討議の報告の中で特徴的なものを挙げると、

- ①子どもにとって居心地の良い生活の場の確保の重要性。
- ②現場・学校・自治体・地域住民が相互に意見を交わし、 子どものより良い育ちのための具体的な方向性を探って いく必要性。
- ③プランでは謳われていない子どもの参画と発達の視点 を忘れないこと。
- ④子どもを大人の管理下に閉じ込めなくても良い環境を、 地域ぐるみで創っていく事の必要性。 などのことでした。

それぞれの現場で起こっている事象は違うけれども、みんな悩みながら、子どもにとって過ごしやすく、成長を保障する場を創ろうと努力していることは共通しているという事が確認出来ました。

4. 分科会で出されたおもな意見(要旨)

- ・地方では縦割りがなかなか解消されず、学校長が学校 敷地内の事故などの責任をとりきれないでいます。プランは拡充の方向にあるが、末端では公設民営で保護者 が運営するところもあり、指導者の処遇や安全管理が 不十分な状況です。
- ・子供教室と放課後児童クラブの共存について、場所の 受け皿、キャパシティ、高学年の対応、職員確保など 運営する立場として不安があります。また、これまでは 養護・福祉、家庭的なものであったが、全児童対策で は遊びを通じた教育という所に幅が広がっていく中で、 どう対応していくのか問われていると思います。
- ・きまりと評価で成り立っている学校の集団生活とは違い、 子どもの素が出せて、親や先生の目というストレスを感 じない、横並びの集団生活の場が必要だと感じています。 それぞれを大事にした子供教室と児童クラブのどちらも 必要だと考えていて、同じ子どもを相手にしているのだ から、学校が連携することは当然であると考えます。
- ・プランには子どもの発達の視点が非常に薄いように感じています。子どもは成長発達につれて出来ることや生活 範囲が拡がり、大人の支援がいらなくなっていく上で、

どこまでが支援として必要なのでしょうか。「遊び」における3つの「間」の危機が叫ばれ久しいが、プランとしてどう対応すべきなのでしょうか。子どもの参画の視点から、遊びの権利や、子どもの声や思いをどれだけ汲み取っていくのか我々関係者としての力量も問われています。

【来賓・厚労省育成環境課 竹中課長補佐】国の考え方は、放課後子供教室、放課後児童クラブの「一体化」ではなく、それぞれの機能を維持しながら連携していく「一体型」が基本です。児童クラブについては職員が大事であり2人以上の配置を義務付ける「支援の単位」という概念も取り入れました。子どもの視点で、自主性に沿って遊びを選択できる環境も考慮して拡充を図っていこうと考えています。

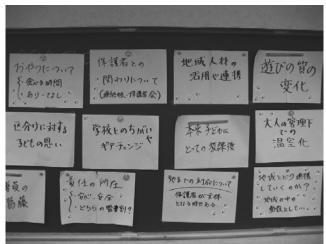
参加者数 48名

担当者から 子どもの放課後をめぐる現状報告、グループ討議、意見交換を通じて、放課後をめぐる環境の変化に伴う不安や課題にかかわる意見が数多く出され、プランの進捗状況や、学校の理解や協力について地域によって温度差が大きいことなどの情報や問題を共有することが

出来ました。さらに4月から始まる子ども・子育て支援新制度(以下「新制度」)で放課後児童クラブの拡充が図られていく一方で、依然として子供教室、児童クラブ、児童館の現場が感じている違和感は、「子どもの放課後とは?」と言う問いの中にあるように思われます。分科会の中のグループ討議においても、子どもの視点を大切にした「放課後とは何か」を問う意見が数多く出されていました。子どもの放課後とは、本来「地域や人との関わりの中で、子どもの自発性や自己決定に基づく遊びや成功・失敗を含む様々な体験を通じて、成長に欠かすことの出来ない多くの学びを得ることが出来る時間である」とまとめる事が出来ると思います。プランや新制度をさらに子どもの視点を取り入れて充実させるためにも、引き続き子どもの放課後の遊びや生活を検証していく機会を設けていく必要性を感じています。

●担当 浅井泉(豊島区:子どもスキップ池袋第三)、島田聖子(中野区:上高田児童館)、豊倉厚(鎌倉女子大学)、上野陽子(墨田区:八広はなみずき児童館)









Re: Born 5 生まれ変われる児童館 ~そのエビデンスを利用者の声から考える2~

社会が大きく変化する中、児童館になにがもとめられているのか。子どもたち、ボランティア、保護者、 地域の方々など児童館利用者の声から、児童館が必要とされているエビデンス(根拠)を導き出し これからの児童館を考えます。

●ゲスト

杉並区母親クラブ 松崎 恵子さん 丸山 尚子さん 品川区大学生ボランティア 川島 悠さん 荒川区乳幼児タイム保護者 鈴木 百合子さん



分科会内容

1. 昨年までの報告

東京都の児童館関係者で開催する学習会(東京・児童館月イチ学習会)で行ってきたエビデンスについての研究内容の報告と、昨年の全国大会で行ったエビデンスに関する分科会の報告を行いました。

会場の壁面には、前回の大会で使用した「こどもたち の声」を掲示して、実際に子どもたちが児童館についてど う感じているのかを見ることができるようにしました。

※「こどもたちの声」:都内の児童館を利用する子どもたちを対象に行ったアンケート。「児童館の好きなところは?」など4つの質問をして、集まった数は約500枚。

2. 利用者の声をきく

実際に児童館と関わっている方々から児童館についての 声を直接聞き、参加者全員で共有しました。

A:子育てを終えた地域のボランティアの発表

- ・杉並区の母親クラブで35年以上活動。
- ・デイキャンプ: 異年齢交流や子どもの成長を直接見ることができた。地域住民と子どもとの触れ合いこそ、大切だと思えた活動である。
- ・ほっとする一む:乳幼児の保護者へコーヒーを提供する ところから始まる活動。親子がほっとする居場所につい て一緒に考える場となっている。
- ・「障がい児サポート」:保護者会の日に、対象児童を児童館で預かる活動。身近な児童館が地域の課題に迅速に対応していると感じられる。

・児童館を拠点とした母親クラブとしては、やりにくい、 やりやすいは館長次第?という本音がある。熱いハート をもった職員がパイプ役になってくれたことで、安心し て企画・運営力を育ててもらったと感じている。

B:小学校時代の利用者、大学生ボランティアの発表

- ・小学6年生のとき同じ学校の1年生から「児童館に遊びに来て」と誘われたことがきっかけ。
- ・そこで出会ったボランティアの高校生や大学生の活動や振る舞いが、カッコよくあこがれを抱いた。その後児童館のお手伝いをするようになったが、中でもいろいろな人の話が聞けるので反省会が好きだった。
- ・児童館の職員が異動などで変わると、ボランティアへの 対応も大きく変わることがある。例えば、今まであった、 企画段階からの話し合いがなくなり、当日のみの手伝い だけとなる等、納得いかないこともあった。その後の話 し合いで、企画段階から関われるようになり、自分の声 を聞いてくれたことが嬉しかった。
- ・利用者からボランティアになり、今も児童館と関わっており、大学卒業後、児童館職員となる。

C:乳幼児活動の保護者の発表

- ・ひろば館(児童館)に通い始めて1年半の母親。地域に友だちも少なく、どこに相談して良いのかもわからず、不安を抱えていた。区で発行されたチラシやHPを調べて、行ってみようと思った。
- ・ひろば館に行くと職員が親切にしてくれ、悩みを聞いて



くれた。乳児クラスに誘われ参加すると、その日だけで 友だちがたくさんできた。月齢も近く、同じ悩みを抱え ている同士仲間意識もうまれた。

- ・職員の方が私の話を聞いてくれたことに感謝。短い時間 でも私を一人の人間として受け入れてもらえ、自分に戻 れた大切な時間だった。
- ・ひろば館には小学生も遊びに来ていて、赤ちゃんにも声 を掛けてくれる。自分にも親しい小学生が数人できた。

3. 参加者同士で話す

発表者の発言からキーワードを抽出し、それをもとに5 グループにわかれて議論をしました。実際にそれぞれの館 で行っている事業について話したり、どうしたらそのキー ワードが実現できるのかという視点で話を進めてもらいま した。

キーワード;協働・受容・あこがれの社会化・多様な意見を聞く・子育で不安の解消・出会いの場の創出

4. まとめる

グループごとに話した内容から「イチオシ」を決めてもらい、グループごとに記事のようにまとめ、「児童館ルネサンス新聞」を作成し、発表しました。

(写真のとおり)

最後に担当者から「回答力」の必要性を話して、まとめとしました。

参加者数 30名

発表者の声

・意識を高く持ち取り組んでいる姿勢、やる気のある方々

が集まったと感じました。このタイムスケジュールでまとまっていく様子は見事でした。

・今回参加して児童館運営側の熱い思いや子どもたちのことをいろいろ考えている内容など聞けて良かったです。 利用者としてあれこれ意見や質問することがあっても現場の先生たちの声を聞く機会がなかったのです。個人的にはグッと児童館が身近になった気がしました。

担当者から

自分たちの館ではなく、違う館の利用者の方からお話をしていただくことで、より実感が湧いたのでは?と思います。短い時間の中で「ルネサンス新聞」というアウトプットまでできたことは、参加者の方々の力が大きく、一緒に取り組んでいると感じられました。

また、児童館に来ていない子どもたちからの声を拾うことについても課題として挙がり、継続した活動にしなくてはいけないと感じています。

「何か聞かれたときに、あいまいに答えないということができているだろうか。回答力を身につけることはとても大事であり、そのためにも、自分たちが行っていることを存在意義・根拠にできるよう考えていきましょう|

ご協力いただいた発表者の方々、参加者の方々、そしてここまでこの分科会に関わり支えてくださったみなさま、本当にありがとうございました。

●担当

鈴木良東(杉並区:善福寺児童館)、近藤千夏(荒川区: 西日暮里二丁目ひろば館)、翠尾由美(港区:麻布子ど も中高生プラザ)、中村公美(ワークショッププレイヤー)











明日からできる!中高生対応 ~そうか!君も私も、中高生だったんだ!!!!~

これからの児童館に求められる『中高生対応』。しかし、「中高生は分からない」という意識から、 新たな一歩を踏み出せないと感じたことはありませんか?中高生の目線に立つことで意識の壁を越 え、中高生に必要とされる児童館に変わるきっかけを考えます。

●コーディネーター

北村 真さん (NPO 法人ちょうふこどもネット・調布市青少年ステーション CAPS) 田島 克哉さん、出口 貴史さん、石挽 利之さん、大山 宏さん (NET / TEENS)

※ NET とは、「関東甲信越児童厚生員ネットワーク NET」の略。有志の勉強会。 TEENS とは、「中高生施設職員交流会 TEENS」の略。有志の見学会及び交流会。

分科会内容

■概要

本分科会は、参加者それぞれの悩みや事例を持ち寄り、中・高校生世代に対する心のハードルを下げ、それぞれの館でできることを見つけることを目標にディスカッションを行いました。

■分科会の流れ

1. グループ分け

アイスブレイクを兼ねて、4つのグループを作りました。

2. グループディスカッション①

グループごとに「行事・イベント」をテーマに実践の共有と、イベントを行う際の悩みを持ち出しました。また、議論のなかで出てきた「ヒント」を、付箋に書き出しました。

3. グループ分け・休憩

「お別れじゃんけん」を行い、グループの半分を入れ替 えました。

4. グループディスカッション②

「日常の関わりについて」をテーマに、グループごとに ディスカッションを行いました。

5. 報告

それぞれのグループで議論された内容を発表しました。

■ディスカッションで出た内容

- 1. 中・高校生世代を受け入れる上での悩み
- ①彼らは「わがまま」「気まま」な存在です。職員が働き かけても「はぁ~? | 「むり! |
- ②イベントをしても、継続的な来館につながらないことが 多いです。

- ③なかには「あばれに来る」ように見える利用者がおり、 「問題行動」を起こしてしまいます。
- 2. 中・高校生世代が児童館を利用する理由とは?
- ①彼らにとって、「あばれる」「自分の話を聞いてもらう」 ような、自分を出せる場所がないのかもしれず、居場所 を求めて来館するのかもしれません。「あばれる」利用 者は、職員がどれだけ受け入れてくれるのか、測ってい るのかもしれません。
- ②彼らの多くは友達同士のつながりで児童館を知り、学区を越えて来館することもあります。彼らは人のつながりで来館しており、職員を含めた他人とつながることを拒絶しているわけではありません。
- 3. 中・高校生世代を受け入れる際に大切なこと ①あいさつをする
- ・「こんにちは」「久しぶり!」という職員からのあいさつが、「君を受け入れるよ」というメッセージになります。 ②問題行動はメッセージ
- ・問題行動は「見て見てオーラ」と捉え、頭からの否定 をせずに職員自身の経験を踏まえた注意を行い、理解 を求めます。
- ・問題行動には職員の配置が関係していることもあります。 お互いをカバーできる配置を考えることも重要です。
- ③一人一人に関心を持つ
- ・彼らの中でなにが流行っているのか、アンテナを張り共 通の話題を持ちます。
- ・一人一人の顔、名前、友達関係、興味があることに関
 心を持ちます。
- ・答えを求める必要のない話し相手となります。
- ・一緒に話し、遊び、目線を合わせる時間を作ります。

ALL TOKYO>>>>> ALL JAPAN

4. 中・高校生世代との距離を縮めるための一工夫

- ①話しをする際に自らの経験を交えて語ることで、親近感 が増します。
- ②「ありがとう!」と口にすることで、認めることにつながります。
- ③親や学校の先生とは違う、身近な大人として接することで信頼できる存在に近づきます。
- 5. 中・高校生世代にイベント参加を働きかける際に大切にしたいこと
- ①共通の話題で話し、距離を縮める努力を続けます。
- ②要望を聞き出し、イベントに反映させていきます。
- ③イベントで役割を任せます。
- ④イベント終了後に「ありがとう!」と伝えます。
- ※「やらされている感」は NG!!

6. 職員間での意思統一

- ①受け入れる際に、職員間で理解や温度差があるのは普通のことです。
- ②アプローチは異なっていても、「利用者のために」という共通のゴールがあるはずです。職員全員で話し合ってのゴールの確認が大切です。
- ③ゴールへむけてできることを考え、例えば職員全員があいさつをするなどのスモールステップから始めることが、 意思統一につながります。

7. 中・高校生世代との距離が縮まるゲームの例

①スポーツ麻雀

- ⑤ アルティメット
- ②ダーツ
- ⑥ ストライク
- ③ごきぶりポーカー
- ⑦ ラミーキューブ
- ④ワードバスケット

8. 中・高校生世代が来館したくなるイベントや日常の例

- ①「バレンタインチョコを作ろう!」等の関心を捉えたイベントを行う
- ②館内でスマホの充電ができる
- ③友達とおしゃべり・飲食ができる場所がある
- ④自分を認めてくれる職員がいる

参加者数 28名

参加者の声

- ・児童館で中高生を受け入れることには戸惑いもあるが、同じように悩んでいる方々が全国にいることが分かり、心強く感じました。「私も中高生だったことがあるんだ!」と思えば、なんとなく思い当たるところもあるし、彼らのためにできることがあるように思いました。
- ・問題行動を職員の目があるところで行うのは、「見て見てオーラ」を出しているのかもしれないんですね。子ども達は居場所を求めているんだと感じました。

担当者から

児童館での中・高校生世代への支援のニーズは増して きています。しかし、設備面などで彼らを受け入れる態勢 はまちまちです。様々な形態の施設の児童厚生員が集まる全国大会で分科会を行うにあたり、議論の方向性への不安もありましたが、参加者の「利用者のために!」という熱い想いが議論を白熱したものにしたと感じています。また、日常の小さな関わりの積み重ねこそが、案外重要なのだと見せてくれました。

中・高校生世代が亡くなる痛ましい事件は後を絶ちません。周囲の誰かが彼・彼女の近くで寄り添うことが出来れば、避けられたであろう事件もあります。それは、被害者にも加害者にも当てはまるように思えます。児童館には、そんなすべての彼・彼女を拒む根拠はありません。誰しも思春期を思い返せば赤面する思い出の一つや二つはあると思います。いけないことも受け入れ、チャレンジを認めようとする児童厚生員が出会ったことが、この分科会の成果であったと感じています。

●担当 北村真(調布市青少年ステーション CAPS)













カードやポータブルゲームは、『あり』 or 『なし』?! ~全国の児童館へ! 新たな遊び企画の提案!~

カードやポータブルゲームについて、真剣に考え向き合う時が来ていませんか?児童館でこの遊びは 『あり』か『なし』か。導入をしている児童館の展開事例を紹介し、また参加者で意見交換します。 最後に、全国の児童館をステージにした遊びや企画の体験と提案をしませんか。

●ファシリテーター

井垣 利朗さん (八王子市立中野児童館 児童館長)

●事例発表

永井 太さん (八王子市立北野児童館 児童館長)

分科会内容

1 アイスブレイク

握手ゲームを楽しみながら参加者が互いに自己紹介を し、心と体をほぐしました。

2. グループ討議

(1) テーマ:施設での子どものカードやポータブルゲームの取り扱いについて

現状把握をするために、参加者の施設での持ち込みの 可否や使用方法など、取り扱いについて情報交換を行い ました。

「持ち込み禁止」「自由に使わせている」「使っていい部屋を決めている」「年齢によって制限している」「ゲームやカードは預かっている」「すべて自己責任で持ち込みを可能にしている」「児童クラブなので考えたことはない」「黙認」「職員がかかわり、子どもだけにしない」「児童館の遊びとして設置している」

(2) テーマ: 児童館・児童クラブの遊びとして『あり』と 『なし』と思う理由

参加者の施設の状況に固執せずに、『あり』と『なし』 と思う理由を決められた色の付箋に書き込んでいきました。

『あり』の理由

「楽しい」「子どもが好き」「熱中できる」「達成感がある」「来館者の増加につながる」「他にできる場所がない」「友達と共有できる」「あきない」「想像が広がる」「持ち込むので児童館の予算がかからない」「複雑なことが理解できるようになる」「交換するという行為が楽し

い」「じっとして取り組める」「ひとりでもできる」「運動が苦手な子がいる」「ゲームを通して交流できる」「外や家で、ひとりでやるよりいい」「コミュニケーションのツール」

『なし』の理由

「持っていないとできない」「トラブルの誘発」「無口になる」「視力の低下」「体を動かさない」「金銭的に高い」「疑似体験」「他の経験不足」「紛失問題」「盗難問題」「そもそも健全育成ではない」「コミュニケーションが取れない」

(3) テーマ:カードゲームやポータブルゲームは、児童館・児童クラブの遊びの一つとして『あり』か『なし』かの理由を追求しよう

- ・付箋を貼りだしながら『あり』『なし』『グレー』などと 模造紙にフレームを書き込み、「児童館としての思い」「子 どもの視点」「保護者の気持ち」「子どもの社会性」「管 理問題」「金銭問題」などの分類テーマをグループで決 めて、マッピングしていきました。
- ・職員のかかわりによって、どちらにもなると『グレー』 ゾーンに貼りだされた意見について、討議を重ねなが ら児童館における遊びとしての有効性を見出していきま した。

3. ギャラリーウォーク

グループを回り、討議の経過の説明を受け、共有化を 図りました。

4. シェアリング

グループ内で討議の経過を振り返り、新たな気づきを



確認しました。

5. 事例発表

カードゲームやポータブルゲームの有効性やトラブル回避を検討した上で、児童館独自の遊びの展開をしている事例を紹介していただきました。

「オリジナルカード (はちもんカード) の創出と実践」「カードの貸し出し制度」「プロジェクターを用いたテレビゲーム大会」「中高生カードゲーム大会」「児童館王決定戦」

6. 新たな遊びの提案「全国児童館王決定戦」

第4分科会からの発信として、3つのコンセプトの新たな遊びの提案をしました。

①全国の児童館でできる身近な遊びを種目にします。② 児童館を利用するすべての子どもが参加できます。③全国 の児童館に遊びが毎日生まれるきっかけを届けます。

参加人数 21名

参加者の声

- ・カードゲームやポータブルゲームの持ち込みについて、 保護者に手紙を渡し、自己責任の上、持ち込みを可能 としているが、トラブルが絶えずに悩んでいる。運営上、 仕方なく対応しているので、他の施設の取り扱いの状況 や職員の考え方は大変に参考になりました。
- ・『あり』か『なし』かの理由を参加者全員で書き出し、 整理したので、仕組みづくりによって、トラブルの解決 と児童館での遊びとしての展開が可能だと思いました。

担当者から

子どもを見つめながら児童館・児童クラブだからこそ できる遊びを創出していきたい。そのために、子どもが熱 中しているカードゲームやポータブルゲームの可否につい て踏み込んで考えてみたいと分科会のテーマを設定しまし た。子どもの遊びを通した健全育成を担う施設として、子 どもの遊びとして流行する理由とその遊びの本質を提示で きる児童館・児童クラブでありたいと思いました。また、 否定するとしても根拠を提示し、子どもの意見を聞き、共 に遊びとしての魅力を創意工夫していくことは児童館・児 童クラブの職員のいる意味であると再確認しました。そこ で、カードゲームやポータブルゲームを全面的に推奨する のではなく、そのゲーム性や子どもの興味を活かした児童 館らしい日常にも展開できる取り組みとして、第4分科会 で「全国児童館王決定戦」を提案しました。遊びとして 楽しみながら、全国の児童館・児童クラブがつながり展 開できることを期待しています。

●担当 井垣利朗 (八王子市立中野児童館)













■ 全国児童館王決定戦のご紹介



全国児童館・児童クラブ大会TOKYO第4分科会発案(とりまとめ役:八王子市立児童館)

全国児童館王決定戦は、児童館でできる身近な遊びを「種目」として、全国の児童館を利用する子どもたちが競い合い、地域の枠を超えて交流します。「児童館だからできる遊び」を生み出すことで、全国の児童館に新たな遊びのきっかけを届けます。

※八王子市で行われている「各月対抗!児童館王決定戦」を発展させたものです。(発展的に展開したものです。)

【トライアル第1回開催期間】

平成 27 年 5 月 1 日~平成 27 年 5 月 31 日

【全国児童館王決定戦について】

■全国の児童館でできる、身近な遊びを種目にします

「児童館でできる遊び」に一定のルールを加えて、全国共通の「児童館だからできる遊び」に変えて 種目とします。種目は、子どもと一緒に考え、ともに作り上げることを目指します。

■児童館を利用する、すべての子どもが参加できます

子どもたちは自分でハンドルネーム(あだ名)を決めて競技に挑戦します。年齢、学年は問いません。 挑戦した結果を全国で集約し、「他の児童館で遊ぶ子どもたち」と、競い合います。

■全国の児童館に、遊びが毎日うまれるきっかけを届けます(こども+あそび×まいにち)

一人で遊びに来た子どもにとっても、遊ぶきっかけとなります。また、友だち同士で挑戦し、競い合うことで、児童館に来館し、遊ぶきっかけを生み出します。

【トライアルの種目について】

- ■トライアル開催での種目は、八王子市が過去に実施した種目を もとに、全国大会分科会で内容を固め、第1回開催前にエント リーしてくださった施設にお知らせします。
 - ※種目の候補案については別紙をご参照ください。
 - ※記録の集約方法、ランキングを学年別に分けるかなどは、 エントリー状況を見て、とりまとめ役の八王子市で判断し、 後日ご連絡いたします。
 - ※ トライアルの結果は児童健全育成推進財団ホームページを お借りして掲載できるように検討しています。
- ■第1回のトライアル開催の後、継続的に実施することを視野に入れて、全国の児童館から、次回の希望種目も募集します。種目については、子どもと考え、ともに作り上げることを目指します。 ※別紙「種目提案シート」参照

【参加方法】

トライアル!

トライアル開催に参加希望の 児童館は、別紙「エントリーシー ト」を記入の上、FAX、または メールにて、記載された連絡先ま でお送りください。

第 1 回開催前に種目や記録方法 など実施要項をお送りさせて いただきます。

お問い合わせ:八王子市立中野児童館 井垣 利朗(いがき としろう) 電話 042-624-9559 (FAX兼) メール igaki_toshiro@city.hachioji.tokyo.jp



■スケジュールのフローチャート

全国児童館、児童クラブ大会TOKYO第4分科会発案〉 全国児童館王決定戦の提案

平成27年1月24日〜4月10日 全国児童館王決定戦の参加エントリー受付

全国児童館王決定戦の参加エントリー施設に種目や実施 大綱の通知

平成27年5月1日~5月31日

全国児童館王決定戦トライアル第1回開催

全国児童館王決定戦ランキング結果発表

種目提案シートの受付

今後の開催における提案受付、再検討、第2回実施大綱 の決定→通知

■八王子市児童館王決定戦の様子(参考)



「もしカメ」に挑戦中!児童館王に、オレはなる!

同じ種目を統一ルールで、市内のすべての児童 盤で1か月間、挑戦することができます。

子どもたちを中心に種目やルールを決めま す。技量が必要な種目や運だけの種目など多様 で、毎月変わります。

様目に挑戦すると記録がランキングに登載さ れます。自分が現時点で、どのランキングかわ かり、張り合いを持って毎日挑戦することがで きます。

児童館でしかできない種目のNo. 1を目指し、 見えない相手との競争を楽しんでいます。

第4分科会からの発案です。 全国の児童館の皆さん ご参加ください。 児童健全育成推進財団の ホームページでも ご紹介します。

全國児童館至決定戦 エントリーシート

全国児童館・児童グラブ大会東京第4分科会発信(どりまとめ役: 八王子市立児童館)

児童館名		ご連絡 担当者	
連絡先	電話	FAX	
	Eメール		
	住所		

- ・
 詳細は、別紙「全国児童競王決定制」をご一勝ください。
- ・全国児童郎王決定戦に参加するためのエントリーシートになります。10いた情報は、本事業以外には使 用致しません。
- ・
 ・
 ・
 後、実施する場合の候補種目についても募集致します(任息)。 実面をご活用いただき、下記方法で ご提案ください。 ご提案頂いた種目の選定事準や調整方法については、第 1 回開催後、実施の様子を課 まえて検討致します。皆さんの考えた帰目が採用されるかもしれません。

■FAX でエントリーする場合

本用紙に必要事項を記載の上、下記連絡先までお送りください。

■メールでエントリーする場合

お手数ですが、「件名」に全国児童館王決定戦エントリー【〇〇児童館】とご入力の上、本用紙に挙げ られている記載事項についてご入力頂き、下記連絡先までお送りください。 ※お電話でのエントリーはお受けしておりません。ご了承ください

直エントリー原向

平成 27 年 1 月 24 日(土)から平成 27 年 4 月 10 日(金)まで(必着)

【連絡先・お問い合わせ先】

八王子市立中野児童館 井垣 利朗(いがき としろう)

環話 042-624-9559 (FAX 東) メール lgakl toshirovcity hachioli tokyo,fo

エゴ・レジリエンス力を高める ~バランスのとれた子育てをするために~

エゴ・レジリエンスは「自己抑制力」「自己解放力」を調整するスイッチ。上手く機能すれば、楽しく子育てできます。エゴ・レジリエンスを理解して、保護者と子どもに対応する際のヒントを学びます。

●講師

小野寺 敦子さん(目白大学人間学部教授)

東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学。 目白大学短期大学部教授等を経て現職。臨床発達心理士。



分科会内容

1. 講師講演

子どもも大人もストレスフルな毎日を送っていて、時にはメゲて落ち込んでしまうこともあります。そんな日々を少しでも前向きに乗り切っていく力、日々訪れる落ち込む要因に対する気持ちの切り替え力、それがエゴ・レジリエンス力です。

私たちの生活の中では、オーバーコントロール(全力でがんばっている)時と、アンダーコントロール(開放して思い切り楽しむ)時があります。エゴレジ力が高い人はこの2つをうまく合わせるスイッチ力が高く、バランスを取るのが上手です。そのような人は、子どもの状況に合わせられるので、子育ても上手にできます。

今の親は二極化しています。アンダーコントロール=放任か、オーバーコントロール=子どもをコントロールするかです。

心の柔軟性、好奇心、立ち直り力がエゴレジ力を高めます。エゴレジ力を高めることは、生き抜く力を高めることにつながります。

講演の中では、「エゴレジカチェック」や、「考え方のクセをポジティブにスイッチする」エクササイズもしました。

2. グループディスカッション

12種類の動物が書かれた自己紹介カードを使って、自分をこの中の動物にたとえるとしたら?という自己紹介をしてから、スタートしました。

小野寺先生の講演を受け、子どものエゴ・レジリエンス力を高めるにはどのような言葉かけや行動が必要かをまず各自で考えました。そして、考えたものを葉の形をしたポストイットに書き出し、それを木の描かれた模造紙に貼り付けていきました。

それを見ながらグループディスカッションしていきました。

3. 発表

グループで話し合ったことを発表しました。

【チーム雷門】

何でもできないという子どもに対しては、職員と一緒に やってみて、こんなことができたねと、結果だけでなく、 プロセスの大切さを知っていってほしい。

キレる子どもには、職員室で落ち着かせた後、話を聴く、 共感するなどの対応をする。

問題行動をする子は自分を見てほしい、かまってほしい という思いが強いので、認める、達成感を味あわせるこ とが必要なのではないか?

【チーム飛鳥山】

成功しても失敗しても、その子どものありのままを認め てあげる。

子どもの外見等、変化があったら声をかけ、あなたをしっかりと見ているよということを伝えていく。

注意をする時は、あなた自身が悪いのではなく、行動が悪かったことを伝える。

告げ口をしてくる子どもに対しては、まず気づいたこと を認める。



職員が、子どもや保護者に寄り添うことが大切。

【チーム赤門】

認める。ほめる。一緒に遊ぶ。楽しく笑顔で! いけないことをした時は、叱る。子どもと指導員が共感 する。

良いことを保護者に伝える。

【チーム荒川遊園】

言葉かけで後押しをする。

新しいことにもチャレンジし、失敗しても大丈夫と次につなげていく。

グループ発表の後、小野寺先生の講評をいただきました。 ほめられて育った子は、エゴ・レジリエンス力が高いこ と。ほめる時はどこが上手等、具体的な言葉で表現する。 前よりここが良かったよとの言葉かけをすれば、先生は ずっと自分を見ていてくれたんだな、と思う。

今はわからないことがあると、自分で考えない子どもが 多い。それはいつも答えが用意されているから。自分で考 える力を身につけていってほしいとのお話がありました。

参加者数 36名

参加者の声

- ・「エゴレジカ」と言う言葉を初めて聞きましたが、今回 の分科会で学ぶことができ良かったです。自由に話す時 間では、他の方の意見をたくさん聞かせて頂き、大変 参考になりました。
- ・エゴ・レジリエンスカチェックで自分の力がわかり、それが子どもにも使えていけると思いました。前向きに、また、子はもちろん、その子に関わっている親の方たち

にも何かの形で、伝えていけたらいいなと思います。

- ・講話を受けて、各館の実践、言葉がけを出し合い、と ても参考になりました。
- ・いつもあなたの事を見ているよ、という発信をしていく 大切さを再確認しました。
- ・あっという間の2時間半でした。発表まで含めたので、 余計に時間配分が難しかったと思います。

担当者から

講師の小野寺先生によるエゴ・レジリエンス力の講演をたっぷり聞きたいと思う反面、全国から集まった皆さんの交流や意見交換も必要だよねと、2時間半という限られた時間を、分刻みのスケジュールでこなしていきました。

参加された皆さんにはお忙しい思いをさせてしまったと 反省点も多々ありますが、両方できて良かったと思ってい ます。

エゴ・レジリエンスとは何かを学び、子どものエゴ・レジリエンス力を高めるにはどのような言葉かけや行動が必要かを考え、わずかな時間ではありましたが、皆さんと話し合い、意見を共有できた有意義な時間でした。

大会の準備、当日を通して貴重な経験をさせていただ き、ありがとうございました。

●担当 鵜澤一充(文京区:本郷児童館)、小熊由紀(台東区:台東児童館)、滝澤由美子(北区:西が丘児童館)、山内朋子(荒川区:熊野前ひろば館)













親子や子どもの心をつなぐ!あそびうた! ~児童館だからこそできる交流うたあそび~

あそびうたは歌とあそびがつながったもので、親子のひろば事業や放課後児童クラブにおいても、 楽しくコミュニケーションをする大きな力を持っています。その有効性を伝え考え現場に有効な児童 館文化として学んでいきます。

●特別講師

福尾 野歩さん(あそびうた作家、旅芸人、元児童館職員)

●講師

福田 翔さん(あそびうた作家、元保育士)

三根 政信&大福(あそびうた作家、あそびうたプレイヤー、児童館職員)

分科会内容

前半は「あそびうた実技」の時間となりました。

まずは、福田翔さん。ふれあいあそびを中心に「はじめましてあくしゅ」「トコトコさん」「おばけと あ・そ・ぼ」の3つを教えていただきました。「ふれあい、じゃれあう中で親と子や先生と子どもの信頼関係や安心感が生まれると思います。子どもたちの自尊心や自己肯定感は大人とのかかわりの中で生まれてくるのだと思います。」というメッセージをいただきました。

続いて、三根政信&大福の皆さんに、小学生でも遊べるあそびうたを中心に「らっかせいダンス(https://www.youtube.com/watch?v=E4tYbSA1Ndk)」「もうすぐクリスマス(https://www.youtube.com/watch?v=1c2rOdTu7H8)」「わっふる」「村まつり」の4つを教えていただきました。(YouTube には講師のダンスがアップされています)

そして、特別講師の福尾野歩さんには、4つの遊びを教えていただきました。「だるまさん○○をしてください!」「マジックマンボ」「いのち」「オレはザリガニ」。会場はぐっと惹きつけられ、大盛り上がりでした。

後半は、ミニシンポジウム「親子や子どもの心をつなぐ! あそびうた ~児童館だからこそできる交流うたあそび ~」を開催しました。講師の皆さんの発言要旨をご紹介します。

●福田翔さん

僕は保育士を8年務めて、あそびうた作家の道に進みました。あそびうたはふれあいのツールの一つとして親子で遊んでほしい、笑ってもらえたらいいなと思っています。いろいろなあそびはあるけれど、苦手なひとでも、「これ

ならできそう」みたいな感じのシンプルなあそびうたを作っています。子どもとのかかわりの中でどんどんアレンジしてほしいと思います。

子どもたちが、自分の出る番がある、自分が発揮できる、 自分を認められたっていうのがあそび歌のいいところじゃ ないかと思います。子どもの気持ちが認められるとか、親 子の楽しいコミュニケーションとか、そういうことを大事 にしてあそびうたを作っていきたいと思います。

●三根政信&大福

- ・紹介した「わっふる」「村まつり」は学童クラブの帰り の会でやりました。小学生もあそびうたでとっても楽し んで遊びます。さあこれからあそびうたをやりましょうっ て言うのではなくて、やりたいと子どもたちが思った時 にすぐできる雰囲気がいいなって思っています。シンプ ルなあそび歌は子どもたちが形を変えたりあそびを作っ ていったりできるゆとりがある。そういう歌を作っていき たいと思います。(三根さん)
- ・三根さんと学童クラブで一緒に組んだ時に「だれだれだあれ」ってとっても子どもが主役になるあそびうたを歌ったんです。子どもたちがわくわくしちゃって、「明日は僕かも」とか、「その次の日は私かも」と期待感があるみたいで、帰りの会になると子どもたちからやる雰囲気になったんです。やっぱりこういう事が大事なんだなって。させるとかしてあげるではないことが大事なんだと、日々感じています。(谷口さん)

●福尾野歩さん

今、児童館はいろいろな問題、課題を抱えていると思います。そういう中で僕たちはその地域の現場でどうやって踏ん張れるか本気で考えていかないと危ないと思ってい

ます。あそびうたの分科会だから、もっと広めていけばいいと思うけど、一番大事なのは歌いたくなるような関係性を子どもと作ってるかどうかなんだと思います。

職員が、歌の時間だから歌うんじゃなく、あそびの時間だから遊ぶんじゃなく、体操の時間だから体操遊びをするんじゃなく、信頼されるような関係性を作れているかどうかが大事なんだと思います。その中に歌も遊びも学習も言葉がけもあるだろうし、悩み相談はあるだろうし、そこにつながらなければだめなんだと思います。

あそびうたを使うならば、心と体の開放ができるようなあそびうたであってほしいと思います。導入で静かにさせるためのあそび歌でなく。子どもは遊ぶ権利があるから、遊ぶってことに対して「大丈夫だぜ」って言い続けるってことが僕たちの仕事(遊びの保障)だと思う。

あなたが、ひとりの児童厚生員としてなにができるのかって、それを子どもに問われているんだと思うのです。 私がやりたいことが何かではなく、子どもに次の時代に渡せるものをちゃんと渡しているのかってことが、僕たちが問われていると思います。その中にあそび歌もあって、あなたたちもいるんです。自分のやりたいことを押し付けない、子どもたちの気持ちに寄り添った仕事をしてください。

参加者数 83名

参加者の声

- ・母親がやってくれたあそびうたを思い出しました。なんでこれを児童館でやってこなかったんだろうと思ったんです。幼児クラブで流行のおどりとか楽しくやっているのですが、これじゃないなって思ったのが、この分科会での発見です。
- ・児童クラブに来る子は心にいろいろ抱えてる子もいて、 寄り添ってあげなきゃいけないと思うけれど…。気持ち

をくんであげるツールとしてあそびうたがあるなって思いました。

・母のおなかの中にいるころからトラや帽子店の歌とか聞いていたので今日はすごく懐かしい気持ちで楽しみました。幼児クラブではあそび歌をやっているんですが、小学生相手には確かにやってこなかった。帰ってきて宿題をやってちょっと遊んだらお迎えが来るっていう生活リズムになっていて、そういう中にどうやって楽しいことを入れていくのかを考えるのが必要かなって感じました。

担当者から

あそびうたはどうしても保育所・幼稚園のものという意識が強いと思うのですが、児童館だからこそ「親と子の交流」につなげる力があると思います。

また、専門職としての力量の大切さを改めて感じました。 子どもの気持ちに寄り添った児童館運営をしていきたいと 思います。「児童館の職員を自信持ってやっていこう」と いう気持ちをいただきました。

●担当 上地史人・伊藤知枝・山下玲子・君島徹也・林 修朗(品川区)

















児童館でバンドやろう!しかも、小学生から ~小学生バンドから広がる児童館活動の可能性~

バンド支援活動は、中高生活動のツールだと思われがちですが、小学生から始める事で、児童館で 長く活動し、かつ世代をつなぐ活動とすることができます。バンド活動支援から広がる大きな可能 性が見えてきます。

●事例発表者

服部 和夫さん (バンド支援館で4年勤務、ティーンズプラザ立上げ後、現在東品川児童センター館長)

栗原 幸男さん(バンド支援館3館で勤務、バンド担当を12年継続、現在八潮児童センターバンド担当)

阿部 里沙さん(保育園で10年勤務後、児童館へ異動。現在滝王子児童センター中高生担当3年継続)

分科会内容

1 事例紹介

服部 和夫氏より事例紹介を行いました。

1) 品川区の児童館ではバンドは小学生から

品川区の児童館における小学生のバンド活動は、今年度20周年を迎えました。当時学童保育クラブに在籍していた3年生の女の子がドラムを叩いてみたいとつぶやき、挑戦し見事に叩くことができました。

子どもの可能性に驚き、また、「私たちもやってみたい!」と言う子どもたちの声に押されて、小学生バンドがスタートしました。以来20年、地域の街づくり協議会や、バンド経験のある地域の若者、偶然出会ったプロのミュージシャンの皆さんに支えられ、多くの小学生バンドが生まれ、中学生、高校生、青年となり品川の児童館におけるバンドシーンを盛り上げてくれています。

2) なぜ小学生から?

小学生バンドは、トラブルの宝庫です。けんか、仲間割れ、パートの取り合い、これらを乗り越えて友達関係を維持できたバンドが成長していきます。バンド活動に求められる力には、子どもたちの成長に必要な力が沢山あります。面と向かってコミュニケーションを取らないと解決しないことがバンド活動にはたくさんあります。日々忙しいメンバーのスケジュールを調整して練習時間を確保してメンバーそれぞれがやりたいことを主張し、相手の気持ちを受け入れながら一つにまとまっていきます。人との関わりが苦手になりつつある子どもたちにとっては、大切にしたい活動です。

そして、小学生から中学生へ、中学生から高校生への 成長と各世代をつなぐ共通ツールとして音楽、バンドが 存在します。小学生から始めるバンド活動は、うまいバン ドを作ることが目的ではなく、バンド活動の中で子どもたちをどう育てていくかを、しっかり考える必要があります。

3) バンドから広がる児童館活動の奥行きと中高生対応

小学生は中高生の活動に憧れます。中高生になったら、「あんな、中高生になりたい!」 そんな交流が可能となるのが児童館です。

しかし、児童館における中高生の居場所づくりは難しい課題です。ハード面で、「中高生向けのスペース」を整備しても場所があるだけでは、児童館に彼らの居場所はできません。「中高生になったら、あそこで活動したい。」と思えるような場所とすべきでしょう。小学生から、バンド活動をして、中高生になったらバンドスタッフとして児童館で活動したい。そんな小学生と中高生を育てたいと思い続けてきました。

4) 歯車がかみ合い回り始める時、大きな可能性が

小学4年生でバンドを始めた子ども達が高校3年生まで同じ児童館で活動すると、合計9年間活動することになります。その間には多くの先輩、後輩との出会いがあり児童館を中心とした地域での活動の中での出会いもあります。児童館は、異世代交流、地域交流の場となり、子どもたちの成長の中で大切な場所となり、自己実現の場となっていきます。核となる子どもたちが友だちや仲間を呼び入れより大きな活動の輪・連鎖が生まれ、バンド活動支援という事業の中に大きな可能性が見えてきます。

児童館の活動は、結果がすぐ出るもの、結果がはっき りと見えるものは少ないです。しかし、目的を持ち、予 想する結果を目指し活動を重ねていくことが重要です。 子どもたちの可能性を信じて進めていきたいものです。





2. 【指導方法の実践講座】 ~楽器を使って~

バンドを始めたいとやって来た小学 3 年生に、最初の 1 時間で簡単なことを教えて、初日でも演奏を体験します。 一人ひとりの音は単純でも、合わせれば立派な演奏になり、そしてみんなで演奏する事の楽しさも感じてもらいます。そのための指導方法を実際に電子ドラムパッドやキーボード、ギターを使って伝えました。

参加者数 21名

参加者の声

- ●興味深く聞かせて頂きながら、自分たちの枠で子ども達を見てきていたのではないかと反省しました。主張ばかりで合わせる事ができない演奏が多いので、児童厚生員の関わり方・向き合い方が大切だと痛感しました。
- ●いい機材を購入したがために、子どもに普段から触れさせてあげなかったことを反省しました。楽器体験講座などの話を聞けて、自館でも取り組みたいと思いました。

担当者から

全国、北は北海道、南は沖縄から21名のご参加をいただきました。参加されたほとんどの方が、小学生バンドの取り組みを真剣に検討されていて、うれしくなりました。しかも、3分の1の参加者自身がバンド経験者であり、関心も高いものでした。

特に、実践講座では実践紹介用に持ち込んだ電子楽器 や、小学生指導用にシール等で工夫したエレキギターに 関心が集まり、機材の規格や仕様をカメラに収めていまし た。

全国各地の児童館に、小学生バンドの取り組みが広がることを期待します。

●担当 服部和夫・栗原幸男・伊藤義則・阿部里沙(品 川区)











アート×あそび

~ 創造は生きる力!児童館だからこそ生まれる活動~

作品を「どうせ捨てられるから」と言って持ち帰らない子はいませんか?見た目を重要視しすぎている傾向はありませんか?造形講師ハダカタビを招き、アートワーク体験&ディスカッションを交えながら「今後の児童館の制作活動」について共に考えましょう!

●講師 アートワークショップユニット・ハダカタビ

畑山 令さん 田中裕佳子さん

田中裕佳子と畑山令によるアートワークショップユニット・ハダカタビ。

日本国内で子どもからおとな向けの様々なワークショップを企画運営中。

●コーディネーター

川和田 優子さん (荒川区立花の木ひろば館)

分科会内容

1. 子どもの現状と様子について

(1) 問題と原因

児童館で制作した作品を「どうせ捨てられるから作らない・持って帰らない」という子どもが増えていて、その状況は学校でも同様である。初めに、そのような状況が生まれる原因を参加者全員で共有した。次に、子どもにみられる問題を2つ挙げ、さらに原因を探ることで解決への糸口としていった。第1に『モノ・結果主義問題』=完成作品のクオリティへの拘り・児童館のサービス化現象が顕著にみられる点を挙げ、その原因として、評価への拘り・親の受容不足等をあげた。第2に『工夫できない問題』=経験不足・発想力&柔軟性の低下・他者を意識しない傾向等を挙げ、その原因として、遊びの減少・既存のモノへの依存・時代&環境の変化等をあげた。

この2つの問題と原因の分析から、インターネットの普及による「目に見えないもの」(ゲームやSNSの友達など)の価値が増し、「目に見えるもの」(モノや現実の友達)の価値が下がっているように感じる。そのような状況から、制作過程や完成作品の価値がダサくうつるという現象は親子そろってみられるのではないだろうか?

以上の子どもの背景等を共通理解した上で、また、「点数や授業ノルマという柵がない児童館だからこそ」という視点で問題の解決法を探っていった。

(2) 解決法についての提案

ハダカタビワークショップの画像・動画を参考に、以 下の項目について提案がなされた。

- ・保護者への説明・メッセージ
- ・報告会等で、子どもの気持ちを伝える場を設定
- ・持ち帰る作品より、内容(体験)が大切
- ・持ち帰らなくてよい作品にシフトする
- ・過程を重視した作品(アプローチ)
- ・体験の時間を子ども達と共有

2. ワークショップ

- ①お題に沿い、個々のイメージをグループで共有し完成作品を描く。
- ②グループ毎に共通する材料から作品を完成させる。
- ③作品の『名前・性格・特徴など』を考える。
- (4) 発表

【ねらい】 特別な材料ではなく身近な材料に新たな価値をみいだし、特定の材料で成立させる工夫と、作品の「結果」ではなく「過程」を心に残す経験や、グループワークで生まれる共同制作を体験する。また、終盤での見せ方の実験により、「捨てられる作品」を「思い出の作品」に変化させ、参加者や保護者の心に作品への愛着を育む工夫も模索することができた。

3. ディスカッション

- ①持って帰らない子どもの気持ちをかんがえよう
- ②児童館でおこなう制作の意義(役割)
- ③愛着が生まれる作品とは?
- ④持って帰りたい気持ちを支えるには?(発見タイム) ☆各グループ発表

グループ毎にテーマに沿い、KJ法により意見を出しあった。

各グループディスカッションでは、捨てる・捨てないについて、また、捨てたくない制作、逆に捨てる制作などへの提案等、アートについて多角的な角度から熱い議論が交わされた。

そして、子どもの意欲を育てるには保護者へのアプローチは不可欠であり、報告会や親子制作・作品展への取組み等をしていきたい。また、作品の結果よりも過程が満足できる制作・形に残らなくても子どもが愛着をもつ制作・実用性のある制作をしていきたい等、今後の取組みへの提案もたくさん出された。

児童館だからこそ異年齢で継続して制作することも可能 であり、家や学校でできないことができる場所である。ま



た、評価を必要としないため、児童館職員が子どもの個性を認める声かけを工夫することで、子どもたちのクオリティへの拘りも解けてくるのではないだろうか? そして、その結果、子ども達同士のコミュニケーションも濃密で豊かになってくるのではないだろうか! という意見も出された。

4. 今後に向けて

今回の「ワークショップ・ディスカッション」を通し、改めて「児童館の制作活動」を再認識する機会となった。この分科会での気づきを具現化するために、それぞれの実践報告『アートメモ』を通し、全国の児童館職員で繋がっていきたい。

参加人数 34人

参加者の声

・同じものを作らせたい職員も多い。今回の分科会で得た

ことを他の職員にも伝えて、自分から職員・保護者・子 どもの意識を変えられるようにしたいです。自信になり ました。

- ・素敵な出会いと楽しい発見いっぱいでした!
- ・とても刺激的な時間でした。自分自身、制作活動と向き 合う機会となりました。
- ・分科会の構成がとてもよかった。
- ・アートに限らず、児童館では自由に企画、運営出来ることを再確認できた。
- ●担当【東京・児童館月イチ学習会 参加者有志】 川和田優子・土屋綾音(荒川区:花の木ひろば館)、大竹 美樹(フラワーコーディネーター)、片渕淳子(墨田区: 江東橋児童館)

アートメモの例:

- <作品名>ぬのをそめよう!
- <材 料>さらし、ポスターカラー
- <作品 & 制作風景>

絞り染め



はけ染め



完成品



展示風景



<ねらい>※企画ポイント (子ども達の経験&体験)

活動のねらい

- ・近隣の児童館に集う子ども達が一緒に遊び、合同で制作する。
- ・出来上がった完成品は、秋の市全体の児童館フェスティバルに作品として展示する。
- 子ども達の体験、ねらい
- ・他の児童館に集う子らと集団あそびをとおして親しくなる。
- ・制作の行程を体験し、共同制作から得る協力の気持ち、出来上がったときの達成感を感じる。
- ・偶然から生まれる面白さ、美しさを楽しむ。













児童館でもっとワクワクドキドキしたい! ~文化体験の力を信じて~

文化体験を切り口に、児童館の「あそび」の可能性を一緒に探りませんか?子ども文化地域コーディネーター協会の方々を講師にお迎えし、ワークショップ形式で、コミュニティアート・文化体験の意味を、学び、語り合いましょう。

●講師

森本 真也子さん(子ども文化地域コーディネーター協会専務理事) 大森 智恵子さん(子ども文化地域コーディネーター協会2級資格者) 林 由佳里さん(子ども文化地域コーディネーター協会2級資格者) 遠藤 貴子さん(子ども文化地域コーディネーター協会事務局)



分科会内容

当初、森本氏を講師にお迎えする予定でしたが、体調 不良の為、代理として、大森氏、林氏、遠藤氏に講師を して頂きました。

1.「あそび」と「文化体験」を考える

参加者をランダムに4つのチーム(1チーム4~5人程度)に分け、「流行っている「あそび」は何ですか?」というテーマで、遊びを付箋に書き、出し合い、グループディスカッションを行いました。これは、全国から様々な県や職種の参加者の共通点を確認する意味もあり、共通している遊びも多くありました。『DS』『携帯ゲーム』『カードゲーム』などの最近出始めた遊びから、『卓球』『一輪車』といったスポーツ、『オセロ』『ジェンガ』といったボードゲーム、『鬼ごっこ』『コマ』などの昔遊びも出ました。共通の遊びで共感したり、初めて聞くような遊びが出た時には、どんな遊びなのかと質問が出るなど、盛り上がりました。次に、出た遊びをジャンルごとに重ね大まかに分けたところ、『室内で遊ぶゲーム』『身体を使って遊ぶゲーム』『昔あそび』などといったジャンルがでました。

続いて、それぞれジャンルわけした遊びをもとに、「その遊びから連想する言葉は?子どもにとって遊びとは何か?」ということを出し合いました。出た言葉としては、『楽しい』『友達とのつながり』『努力する』『成長』『自由』『笑顔』『癒し』『自己表現』『自発』『トラブル』など。

講師より

児童福祉法第40条の『児童館等児童に健全な遊びを与えて、(以下略)』と、児童館ガイドラインの1-2の目的『児童館はすべての子どもを対象とし、遊び及び生活の援助と(以下略)』に触れ、遊びとは本来子ども自身が

主体的に個々の喜びによって形成されるもの、今求められる児童館像として、遊びは『与える』ものではなく、『支援』するものなのでは?という投げかけがありました。

2.「文化体験」について考える

2回目のグループディスカッションとして「「文化体験」って何をイメージするか?」というテーマで、文化体験からイメージする言葉をあげて話し合いました。あがったキーワードとして、『鑑賞活動』『人形劇』『和太鼓』『ダンス教室』『版画』『どんぐり染め』『仮装』『異文化交流』というのがあがりました。

講師より

『表現活動』『創作』『様式美』『伝承文化行事』『まつり』 『食』『自然体験(キャンプ)』『学び』といったキーワードに触れ、文化は集団の中で生まれるもの、一人でやっていることではない、時間の積み重ねを経て文化となるものなど、社会の中で、人と関わり合いながら作っていくもの。子ども達のあそびも共通している。『あそび』と『文化』は同じ!

また、『デジタルネイティブ(原住民)』『デジタルイミグラント(移民)』『デジタルエイリアン(異星人)』に触れ、子ども達がまさにデジタル社会にどっぷりつかっているが、デジタル技術によって作られたものを扱うのは、アナログカ(五感)であり、人間社会を創っていくのもアナログが大事。教育と文化はどちらが上というのはなく、どちらも子どもが人間として育っていく上で大切で、根底に遊び(文化的)な力がないと前に進んでいく力が出てこない。子ども達の魂を揺さぶるようなものが日常にあるかどうかが大事で、特に小中学生には生活圏(学区内)にそ





遊びのジャンル分け 各グループからあげられた遊びをホワイトボードでジャンル 分けして共有をしました。



遊びから連想するワードのジャンル分け 各グループからあげられた「遊びから連想するワード」を ホワイトボードでジャンル分けして共有をしました。



講師林氏からの分析 それぞれグループからあがったワードや全体ででたジャンル分けなどを受け、文化体験の立ち位置からコメントを頂きました。

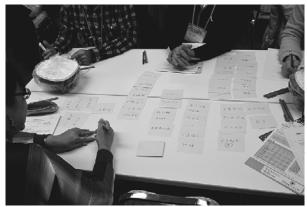
ういった場 (コミュニティアート) があることがとても大事。 その場を支援していくのは、地域資源をコーディネートするという事も含め、児童館といった公共施設の重要な役割だと感じる。また、子ども達がとても狭い世界の中で生きていて、様々な人や友達に気遣いや人間関係を気にして生活をしている状況があるからこそ、子ども達の心を解きほぐし、子ども時代をどのように楽しい思いを広げられるか、そういった意味でもコミュニティアートは大切、という提案がありました。

3. 児童館のこれから

3回目のグループディスカッションのテーマは「児童館の可能性」とし、各施設での地域との協同した取り組みなどの事例が多く挙げられ、今後の可能性としては、いかに地域資源の活用が出来るのかという事が話されました。



会場全体 講師の話しを受けて、グループディスカッションを行いました。



グループディスカッション 最近児童館で流行っている遊びを出し合いました。

参加者 18名

参加者の感想

- ・遊びとは何か?といった根本的な事を改めて考えたり、 様々な現場からの生の声が聞けて、大変有意義でした。
- ・全国の様々な実践が聞けて有意義でした。
- ・(児童館の) 予算が削られたり、他の目的を持った複合施設になったり、岐路にたたされているからこそ、『地域との連携』に存在価値を見せていって欲しい。 貧困を抱えた子ども達にも一律文化体験を支援していく意味でも公共施設が持つ役割が大きい。(講師大森氏)

担当者の感想

様々な現場の方と一緒に考える場が持てたことは有意 義だったと感じています。講師の方からも触れられている が、児童館は社会的意義を問われている岐路に立たされ ている。これからの児童館の可能性として、地域資源を 活かした文化活動を取り入れ、生活圏内の全ての子ども 達にいかに豊かな文化圏を保障している発信基地になれ るかだと感じ、今回の分科会を取り組みました。その上で、 キーワードとなる児童福祉法や児童館ガイドラインにも触 れる事が出来、有意義だったが、もっと実践例を含めて、 児童館×文化体験ということを深かく学べる場をこれから も設けていきたい。



●担当 神山千歳(熊川児童館)、中川洋一(田園児童館)、 吉永正樹(武蔵野台児童館):福生市

児童館での職員の立ち居振る舞い ~児童館職員は千変万化~

児童館では、来館者と関わる様々なシチュエーションがあります。場面の違い、対象者の違い、 そしてテンションの違い。参加者のみなさんと、それぞれの場面で「立ち居振る舞い」を再現しながら、 「奥義」を究めてみたいと思います。

分科会内容

1. アイスブレイク

アイスブレイクとして、誰かと目が合ったらニコッとしてハイタッチをする「アイコンタクト&スマイル&ハイタッチ」を行いました。それから相手が持つハンカチを目を見ながら抜き取る「ハンカチ取り」をして一人ひとりの距離を縮めることにしました。さすが普段から現場にいるみなさんのこと、あっという間に空気は温まって、少し暑く(熱く)なるほどでした。

「じゃんけん合わせ」は5人で同じものが出るまで人を替えてじゃんけんしました。合った人同士で一組のチームをつくり、そのままワークショップのグループとしました。

2. 主旨説明

皆さんの気持ちが温まったところで、世話人より分科 会の主旨説明をしました。ポイントは以下の通りです。

昨年の大会の分科会では「おとなが返事をしてくれるから児童館が好き」という中学生の感想がありました。 その時感じたのが、子どもたちに向けての「レスポンス(反応)の重要性」でした。

- ・私たち職員が子ども達、おとな達の前にどんな姿で立つのか?
- ・相手(来館者)の表現にどう向き合って、どうレスポンスをするのか?
- ・心地の良いのはどんなかかわり方だろう?

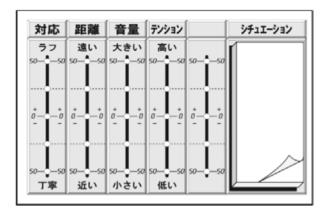
それは思想や手法だけで語られるものではなく、きっとみなさん自身の身体から出てくるものだと思います。身体がどう動くのか、身体をどう動かすのか?実際に動きをデフォルメしながら動きあってみることで、何か見えてきたらいいと思うのでやってみましょう。

3. パラメーターの紹介

パラメーターの絵を見るだけでは、なんとなくピンとこない雰囲気。そこで、説明もそこそこに、サンプルとして「折紙の折り方を教える」場面をロールプレイで実演しました。まずは通常通りの「教え方」で動きだし、一度ストップをかけて、パラメーターで変化を。

- ○テンション→高い
- ○音量→大きい

- ○距離→遠い
- ○対応→丁寧



まあ、ここまで派手に変化させると、見ていて思わず笑ってしまう実演になってしまいましたが、パラメーターの使い方というか効果は、伝わったようでした。

4. グループごとにロールプレイ

世話人で用意した設定は以下の3つでした。 設定①「ドッジボールの場面。アウト?セーフ?」 設定②「来館してきた子が S けんをしたいというけれど…」 設定③「乳幼児親子の広場事業」第1回・説明会

設定を示すとすぐに動き出すかと思いきや、それぞれの 児童館現場で起こる状況をお互いに情報交換することが 始まりました。アウトかセーフかの判定を求められた場面 でも、人によってさまざまな状況が考えられるようで、中 には、見ていないところで遊んでいた子どもたちがやって きて、アウトかセーフかを決めてくれと言われる場面を想 定しているグループもありました。世話人が考えつかな かったようなたくさんの場面が、次々に各グループで交流 されていました。

そしてある程度それぞれの場面を共有した後、グループ ごとに実際にセリフを口に出してみたり、あるいは立って 演技をしてみたりと、少しずつ再現をするロールプレイが 始まります。おもしろかったのは、意外にも職員の動きより子どもたちの動きがとてもリアルに表現され、そこに子 どもたちをとらえる職員としての「目」があるのだと感じました。

ALL TOKYO >>>> ALL JAPAN

ドッジボールのアウトかセーフかを求められた場面でも、「ラフな関係でテンションがすごく高い職員だったらどうなる?」とか、「丁寧な話し方でテンションも低い職員だったらどうなる?」など、グループによって異なる様々なシチュエーションが再現されました。残念ながら各グループで再現された場面ひとつひとつをここで表記することは、紙面の都合でできません。

でも、大事なのは出来上がった再現シーンではなく「立ち居振る舞い」を再現し合い変化させることで、違う「立ち居振る舞い」に出会うことです。違うというのは、自分以外の人の「立ち居振る舞い」であったり、変化した後の自分の「立ち居振る舞い」であったりするのです。そこから、グループのメンバー同士が何を感じるか?それこそが、この分科会の最大のポイントです。

各グループとも、再現をしては語り合い、パラメーター をいじり、変化を楽しみながら、身体を動かし続けていま した。

*意外なエピソード

休憩後に、設定③「乳幼児親子の広場事業」第1回・説明会を発表してみることになった際、自分の館の事業に該当するものがないという声が多数ありました。そのため各グループで「親子の広場とはなんぞや」という話が盛り上がったのは意外でした。

5. まとめ(世話人より)

この分科会は、分科会として何か結論がでるわけでは ありません。むしろ「やって見られてよかった」というの が感想です。





でも、今日やってみた「パラメーターを使って自分の動きを変化させること」は、実は私たちが日々の現場でそれぞれ個々に無意識に行っている事なのではないでしょうか?

子どもたちと「もうちょっと距離を取ってみよう」とか、「もう少し厚かましくかかわってみよう」とか、「声を大きくだそう」とか。そういう自分の「立ち居振る舞い」の微調整を、来館者とのさまざまなかかわりの場面の中で行ってきているのです。意識的に、あるいは無意識的に。

今日の分科会では、それをあえて意識的に、極端に表に引き出してみたに過ぎないと思うのです。それを、お互いに共有することで、刺激を受けたり我が身を振り返ったりできるということなのだと思います。

だからぜひ、今日の分科会で終わるのではなくて、それぞれの地域に帰ってから、パラメーターを使って「立ち居振る舞い」をお互いに見せ合うような取り組みを、みなさんの仲間ともやってほしいなあと思います。これは、世話人からみなさんへの提案です。

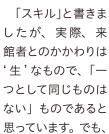
参加者数 29名

参加者の声 ☆いろんな表情ができて、楽しかった。ついつい怒ってしまっていたような場面も、違う視点でとらえられた。☆いろいろ、パラメーターでふるまいを変化させてみたけれど、けっきょく落ちつくところは自然な自分の立ち居振る舞いなんだと気付いた。☆面白かった。職場にいる低いテンションで子どもにも真面目に対応する人の顔が思い浮かんだ(笑)。☆オーバーなアクションだったからこそ、どういう対応が場面にマッチしていたかを考えることができた。

担当者の感想

「もっといろんな場面で、いろんな人とやってみたい」というのが感想です。今回は限られた時間の中での分科会だったので「世話人が示した設定」で実験してみたにすぎません。本当は個々の現場で感じられている場面を持ち寄って共有し、そこでの職員としての各自の動きを振り返ってみる事、変化させてみる事ができたらいい

のです。さらに、お 互いがそれを見て感 じ合い、意見を言 い合うことで「スキ ル」としての「立ち 居振る舞い」が見え てくるのかもしれま せん。





自分の体の動き方を他者から刺激を受けて見直すことは、「かかわり合う感覚」そのものへの刺激になるのだと思います

一人でやるよりも、ずっと楽しく、豊かに行えるのではないか、そんなことを感じられた分科会でした。参加者のみなさん、ご協力ありがとうございました。

●担当 安藤耕司 (こども施策企画課)、竹部正人 (上石神井児童館):練馬区

■ 分科会 11

一人ひとりが☆キラリ!

~障がいのある子どもと育ちあう児童館・児童クラブ**~**

障がいのある子どもの受け入れや、子ども同士のかかわりなど、私たちの役割はまだまだあります。 めまぐるしく変化している社会・制度の中にあっても、子どもたち一人一人が「自分らしく・地域の 中で・育ちあう」施設運営を考えてみませんか。

●事例発表

森口 妙子さん (条東小学校仲よし学級 指導員(大阪府泉大津市))

分科会内容

1. 分科会趣旨説明

分科会発案の小西より、全国大会の歴史のなかで「障がいのある子ども」がテーマに挙がるのが約20年ぶり2回目ということ、障がいの有無にかかわらず一人ひとりの子どもに向き合う私たちの働きについて共有していきたいという趣旨説明をしました。

2. グループワーク①

「自己紹介&課題・お悩み共有タイム」

北海道から沖縄まで、全国各地から集まった皆さんが6つのグループにわかれ、今回参加した「きっかけ」や、業務のなかでの「悩み」「課題」を付箋紙に各自記入し、その後、一人ずつ時間を設定して、付箋を模造紙に貼りながら、自己紹介を行いました。

3. 事例発表

森口妙子さんより、放課後児童クラブでの障がいのある子どもとの出会い、指導者としての支援の悩みや、子どもの成長の変化などをリアルに軽快にお話して頂き、「初めは特別扱いだった子どもたちが、お互いを認め合い笑いあっているのはなぜか?その答えは私たち大人にあるのではないか?」と、話題提供していただきました。

4. グループワーク②

「課題やお悩みに対する解決方法は?」

グループワーク①で出た課題や悩みに対して、それぞれ の実践のなかでの意見交換や解決方法の提案などを行い ました。

各グループより、「子どもの良さを見つけ、ほめる」「子ども同士の関係づくり」「障がいの理解や対応方法を知る」「保護者との会話と信頼関係の構築」「学校との連携による支援方法を共有する等の協力」などが挙がってきていました。

5. グループワーク③

「そもそも課題の原因って?」

その時々の解決方法もさることながら、その課題の根っ この部分に生じている原因について、その子どものみなら ず、環境や社会情勢にも目を向けながら意見交換を行いました。

各グループより、「忙しい(子どもの放課後、親)生活」「施設が狭く、騒々しい、ゆったり過ごせない環境」「施設ルールや職員が厳しい(対応)」「親が子どもとの時間を持てない(ゆっくり会話できない、対応できない)」「親が障がいを認めない」「職員の情報共有のなさ」「協調性を求めすぎる、自由がない」「周り(子ども・親)の障がいに対する理解がない」などが挙がってきていました。

6. グループワーク④

これまで課題に対する「解決方法 (How?)」「原因 (Why?)」について話をしてきましたが、私たちが「何を (What?)」を大切に子ども一人ひとりと向き合っていくのか意見交換を行い発表しました。

各グループより「(職員間の)コミュニケーション」「その子にとって意味あること(を大切に)」「(ありのままを)受け入れる」「(家族や学校、関係機関等との)連携」などが挙がりました。

7. 自分へ贈るメッセージ

全グループの発表を共有したところで、参加者一人一人の時間を持つために、「わたしのいいね!カード」を記入していただきました。これは、自分へ贈るメッセージとして、明日からの仕事にむけて、自分自身にエールを送る言葉として、分科会を通じて感じたこと、考えたことを書いて持ち帰ってもらうことにしました。

8. まとめ

小西より、絵本「ふしぎなともだち」(作:たじまゆきひこ) (※1)の紹介をしました。

(※1)ことばでわかりあえなくても、心はわかりあえる。 島の小学校に転校してきたぼくのクラスには、自閉症の やっくんがいた。障がいの有無をこえて「共に育ち、共 に生きる」ことをえがく絵本。

この絵本のメッセージとグループワークのまとめとして、「私たちの仕事の究極の成果や結果というものは、子 どもが大人になってはじめて見えてくるのかもしれない」

「私たちは、子どもが"自分らしく""地域のなかで" "育ちあう"ことにかかわりながら見守っていける数少ない存在(役割)ではないだろうか?」「"How?"や"Why?"だけではなく、大切にしていく"What?"の部分を共有できたことが意味あることだった」と話し、子どもにかかわるすべての人たちが"一人ひとりが☆キラリ!"と輝いていこう!!と締めくくりました。

参加者数 29名

参加者の声

- ・グループごとに意見交換することで、自分自身の課題を 見つけることができました。
- ・「職員の姿勢が大切」など、知識・対応の研修と職員間 の情報共有が大事であると感じました。
- ・子どもを障がいのあるなしで区別するのではなく、どの 子に対しても一人ひとりに丁寧にかかわり、わかりやす く伝えることを大事にしたいです。
- ・日頃からの親との対応、特に何気ない会話を重ね、それが信頼関係を築く一歩になると思います。これがいざという時に、保護者への説明が伝わりやすかったり、理解をしてもらえたり、困っている時の相談につながると感じました。
- ・もう少し具体的な対応や、方法について、聞いたり話し 合いたかったです。

事例報告者から 分科会では、様々な角度や立場からたくさんの事案が出されました。そこで得たアドバイスや新しい発見は、これからの私に力を足してくれました。そして、分科会で決まった私の指針、それが、「いいねカード」です。『子どもと丁寧にやりとりする。その生活づくりを大切にしたいと思います。』(一部抜粋)

担当者から 「障がい」をキーワードにした分科会が、過去、全国大会で少なかったこともあり、参加者はこのテーマに期待も高く、また、日常での課題や悩みを積極的に話してくださり、最初から活気のある分科会となりました。話題の中心は、職員としての姿勢、どの子にもかわりなく接することの大切さが語られていました。

一人ひとりの子どもに向き合い、その育ちあいをサポートしていくことの議論を通じて、ケースワークのみならずグループワーク、コミュニティーワーク等も含めた広義のソーシャルワークの実践を深める機会となったと考えています。今後も「障がい」や「インクルージョン」「地域生活(子育て)支援」「子育て支援と障がい福祉」などをキーワードにした継続的な分科会実施を提案させていただきます。

●担当 小西秀和(社会福祉法人西陣会 京都市障害のある中高生のタイムケア事業「ういず」、西陣児童館)、 熊澤桂子(小田原短期大学)























■ 分科会 12

ランドセルで児童館!? ~児童館の生き残り大作戦??~

「ランドセル来館事情」が児童館にもたらすものは? 児童館の域の生き残りのため?待機児解消のため?各自治体の対応も様々です。 本来の児童館機能はどう考えればよいのでしょうか?みんなで話してみましょう。

●ゲストスピーチ

渡邊 昇さん(目黒区:駒場児童館)

橋本 栄蔵さん(目黒区:子育て支援課児童館係)

分科会内容

参加者が時間になり続々と部屋に入ってきました。顔を つなぐことを考えて名刺交換を計画していましたが、すで に積極的に名刺交換を始めていました。(さすが~!)

さて、ランドセルを背負ったまま児童館へ来館するのは 「寄り道」なのでしょうか?ランドセルが遊びの邪魔にな る荷物になっていないでしょうか?…

子ども達の放課後の安心・安全を保障しながら、遊びの時間も確保したいと考える全国の児童館に携わる職員や関係者が立場や地域を超えて、それぞれの意見を出し合い討議と情報交換・交流をしました。

参考|ランドセル来館に関するアンケートより

【質問1】

「ランドセル来館」を制度として導入していますか。

- ・はい 15 (24.6%)
- ・いいえ 46 (74.2%)

【質問 2】

(1でいいえと回答) 今後「ランドセル来館」の導入を

- ・検討している 6(13.1%)
 - *「検討していく予定」1件含む
- ・検討していない 40 (86.9%)

(2014/9/24:一般財団法人 児童健全育成推進財団調査) (http://kodomo-next.jp/materials.html)

1. 分科会を選んだ理由(自己紹介)

- ◇ランドセル来館の課題や実施方法を知りたい
- ◇ランドセル来館を実施して効果はあるの?行政・学校から認められていない!
- ◇利用者が利用しやすい方法を考えたい
- ◇ニーズはあるが放課後児童クラブとの住み分けをどう考えたらよいか?
- ◇保護者からの要望が増えている

◇平日の小学生の利用がしにくくなっている ◇利用者が増えるために色々な試みをしたい などが挙がりました。

2. 各グループで参加の理由をもとに討議

直接来館は児童館の生き残り作戦なの・・・?

どうもそれだけではありません。ランドセルの存在が子 どもの貴重な時間を奪っているのも現状です。各地域の 様々な実状が浮かび上がってきました。

ランドセル来館を実践している児童館は少なく、これから実施を予定している児童館も情報が少なく不安を抱えているようでした。

またランドセルの直接来館に否定的で、周囲に理解されていない地域が多いこともわかりました。

意見交換からは子どもの生活実態や職場内の考えを十分に検討する必要性が高いことも見えてきました。

○目黒区の実践より

- ・児童館 14 (公営 13/ 民営 1)
- ・小学校 22
- ・学童保育クラブ 26 (公営 20 民営 6)

~渡邊さんより~

《経過》

平成18年 ①地域の子ども達が放課後の安心安全な居場所を考える

②学童保育クラブに待機児童がいる などの課題が浮上し職員が話合う。(学校や 教育委員会と協議)

平成19年 ランドセル来館事業をスタート

- この制度利用の主な要件・児童館の事業に参加する
- ・学童保育クラブに入所希望(待機児)
- ・学童保育クラブの入所基準に満たないが、留守番させ るのは不安
- ・一時的な保護者の不在(入院、介護、フリーランスなど)













グループ討議②

3.11(東日本大震災)後に利用者が増加したそうです。 子どもの所在確認ができる→安心安全の担保になるので はないでしょうか。

この事業の評価として、①利用者の増加 ②次の事業 につなげる ③サービスの拡充をあげられました。

~橋本さんより~

これから仕事を考えるとき、思考回路に注入することを お勧めしたい言葉が印象的でした。

「寄り道」の概念が固定化されていないだろうか、思い 込みをしないで発想を変えてみては・・・。目的が明確 であれば「寄り道」ではないのでは?

直接来館は「寄り道」になるのか、地域や学校で聞く こともハードルを越えるきっかけになりますよ。

重要なのは、私たちが「子どものために発信する力」・ そして「仕事が人を育てる」というモチベーションを持つ ことです。

グループの報告 (東京にちなんだグループ名)

上野動物園 児童館も変化しているが、新たなニーズに も応えたい。本来の児童館機能も併せて考えたいです。

お台場 目黒区のランドセル事業スタート時の発想に違 いを感じました。しくみや連携を考えるには情報が不可欠。 違う立場の人の考えを切り崩す作業も必要ですね。

東京タワー 子ども達の居場所の選択肢が広がります。 スカイツリー 現状を話し合い、地域に見合ったランドセ ル制度が望まれます。

浅草寺 立場や地域は様々ですが、仕事や子どもに対す る気持ちは同じでした。

《目黒区へ質問》

①ランドセル来館の特徴は?

1~6年生まで受け入れる。広範囲の受け皿でほとんど の児童が対象となります。

②利用の多い学年は?

主に1~2年生。障害のあるお子さんも増えました。 (参考文献: じどうかん 2014 No. 74 秋号)

参加者の声(アンケートより抜粋)

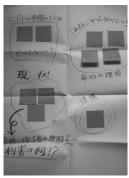
- ・学校から児童館へ直接来るのは「寄り道」の概念がま だ職員側にもありましたが、意見交換で目的が整備され ていれば受け入れが可能だと気付きました。
- ・なんとなく先が見えてきました! 職場に帰ってから、報 告を熱っぽく語り行政に働きかけます。
- ・全国の方が集っているからこそ抱えている問題を話し合 え、たくさんの情報を得ることができ貴重な時間を過ご せました。

参加人数 29名

担当者から ◇今までの児童館のあり方プラス、今の子ど も達を取り巻く状況を考え、私たち職員の「子どものた めに発信する力」は、とても大切だと感じました。今回も たくさんの方々がこの分科会に参加してくださり、同じテー マで考えることができたこと・子ども達のことを真剣に熱 く語れる仲間がいることを嬉しく思いました。

◇ランドセルが従来の赤と黒からカラフルで楽しめるもの に変わっていくように、社会も子ども達の生活も変化して います。いま遊びの重要性を問う私たちに、その時間を 創り出すことが課題となっているのではないでしょうか。 全国大会で地域を超えた仲間と出逢え、真剣に語れるこ とがパワーの源です。

●担当 水野かおり(台東区:寿児童館)、坂内八重子 (北区:志茂子ども交流館)









■ 分科会 13

虐待を水際(児童館)で食い止めろ!

児童福祉施設である児童館には虐待の早期発見・対応と共に予防的活動が期待されています。 専門機関と連携し、児童館の専門性を生かした支援のあり方を検討する分科会です。

●講師

竹中 雪与さん (東京都児童相談センター 事業課長)

東京都に入都後、東京都杉並児童相談所児童福祉司、東京都小平児童相談所所長を経て現在にいたる。 東京都児童館等連絡協議会会長も務める。

分科会内容

1. ミニ講義「早期に気付き子供達を守るためには」 竹中講師

竹中講師は入都後すぐに杉並児童相談所の児童福祉司として勤務され、数々の虐待ケースを担当されました。そのご経験からケースへの対応ばかりでなく、予防の重要性も強く感じておられ、児童館への期待も含め、主に以下のお話しをされました。

○ 例えばこのようなケースが…

「高校卒業後、東京に出て暮らす未婚母がAちゃんを出産。実父は不明。母は身近に知り合いや相談相手もなく、Aちゃんとの関わり方や経済に不安もある。どうすればいいんだろう。」

「毎日児童館に遊びに来ていた男の子。実は養父から 度々暴力を受けていた。そして、いつの間にか児童館に来 なくなった。近隣の人はその音に気づいていたのに。」

などのような事例が代表的です。私たちに何ができるのでしょうか。

○虐待の基礎知識

虐待の種類、虐待の対応状況(件数、経路別、種類別等)のデータ、虐待の判断(家庭や子どもの様子から判断、気づきへの目を養う、気づきへの前提と留意点)を紹介。

子どもが示す言動に注意し、子どもや保護者の様子、 状況が「変」と感じたら虐待を疑う必要があります。子ど もは自分から「虐待されている」とは言い出さず、どんな につらくても、自分から保護者を悪く言うことができず苦 しんでいます。

○ 子どもへの影響

虐待は子どもに様々な影響をもたらします。虐待死、愛着障害、反社会的行動、虐待の連鎖などです。養育者との愛着形成の時期の虐待は、愛着の機能不全を招き、子どもの心身、情動、人間関係、価値観に影響し、社会的

価値観の欠如や虐待の連鎖などのリスクが高まります。

○一時保護

生命の安全の確保、安全な生活環境下に置くことで的確な情報収集をするために、一時保護をおこないます。 児童館に遊びに来ていた子どもが、児童相談所と児童館との連携により一時保護に至ったケースもあります。

○関係機関の連携

一時保護後は、福祉関係機関、医療関係者、学校、 民間団体等が連携して、子どもと養育者が再び家族関係 を構築し、地域で生活することができるようにするための 支援「家族再統合」が図られます。環境を整え、何度も 試しの外泊を繰り返し、時間をかけて慣らしていきます。 児童館には、地域における家庭支援のネットワークの一 員として、子どもと養育者が一緒に暮らす場合などの継続 的、長期的な見守り体制の一角を担うなどの機能が期待 されます。

○ 問題解決に向け ― 防止から予防へ ―

虐待解決のためとはいえ、親子分離は子どもの不安も 大きく、親子関係に変化を招いたり、施設の限界があっ たりします。地域の中で親子に寄り添い、早期発見や早 期対応を図ることが必要です。

そのためには、支援者が親との関係を構築しなければなりません。「育児を知らない」「独自の価値観を持っている」「自分勝手」「孤立している」などの「困った人」は実は「困っている人」。何もない時にこそ、話かけ、寄り添って欲しい。

子どもの虐待は、どこの家庭でも起こり得るものであり、 虐待をしている親自身が悩み、やめたいと望んでいる場合 も多い。虐待をする親と子どもへの、周囲のあたたかい 支えと適切な支援をお願いしたいと思います。

2. グループディスカッション

グループに分かれて「日常の中で気になること」「課題





だと感じていること」「その対応策」等について議論を行い、 その後、各グループからその概要を発表していただきまし た。

○主に以下のような発表がありました。

- ・児童館は子どもの日常的な居場所。子どもに近い存在 であるがゆえに、気になる子ども、家庭に気づくことが 多い。一方で、行政の動きが鈍く、対応が進まないこと もある。行政との関わりを強め、児童館が働きかけて支 援を進めていくことも必要。
- ・「いつも同じ服を着ている」とか、「食事が取れていない」 など、ネグレクトが疑われる子どもに遭遇することがあ る。服や食事の支援をしたいところだが、どこまでやっ ていいものか悩ましい。食べ物をみんなで作るプログラ ムを実施して食べさせたりもするが、児童相談所や要保 護児童対策地域協議会との連携は重要と感じさせられ
- ・家庭の背景を考慮しながら保護者にアプローチしたり、 保護者自身へのケアが求められたりする。支援が一貫し て連続性を保たれるために、地域の関係機関や団体が 連携、協力し合うことが重要。
- ・職員それぞれの関わり方に差異が生じないように、職員 間の情報共有が必要。ソーシャルワークの学習やケース カンファレンスで共通認識を持つなどしている。

最後に竹中講師からコメントをいただき終了しました。

児童館は子ども達に近い存在なので、虐待や、虐待に 及びそうなケースに会うこともあると思います。自分が経 験した中にも、児童館が子どもと保護者の間に入り、対 応が進んでいったケースがあります。その時、とにかくひ とりの職員が問題を抱え込まないことが重要です。職員間 で問題を共有して共通認識を持ち、自治体や児童相談所 と関わりながら対応していく必要があります。児童館の機 能に期待し、今後も協力して対応できたらよいと思います。

参加者数 27名

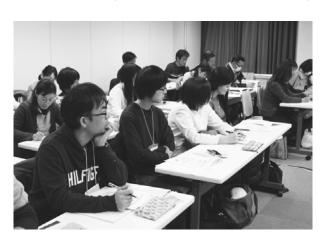
担当者から

竹中講師の話された事例や様々な情報は、あらためて 虐待が子どもに与える影響の重大さを確認し、子どもや 家庭への支援の重要性と児童館に何ができるのかについ て考える機会を与えてくださいました。

地域に根差し、子どもや子育て家庭の居場所となって いる児童館だからこそ、どこの児童館でも虐待に遭遇する 可能性があり、また、児童館だからこそできる活動、やる べき活動があるなと思いました。親の仲間づくりのための 乳幼児活動や、子どもやその家庭の様子に気を配り、気 になることがあれば、声をかけたりすることなどは日常的 におこなわれていますが、大切な虐待予防活動だと思い ます。また、地域の社会資源として、積極的に関わること も必要ではないかと思いました。子ども一人の命や生活 にかかわるのですから。

最後に、ご多忙の中、貴重なご講義をくださった竹中 講師、突然のお願いにもかかわらず、会場設営、受付、 グループ分けをお手伝いくださった、いわて子どもの森の 長﨑さん、愛知県児童総合センターの髙阪さんに御礼申 し上げます。

●担当 渡部博昭(一般財団法人児童健全育成推進財団)



■ 分科会 14

もっと若手!児童館ワカゾー下克上!?

荒波にもまれながら、日々懸命に子どもと向き合うそこのあなた! その思いを吐き出してみませんか? 全国の多様な現状について語り合うとともに、現場で奮闘する若手だからこそ見える、児童館の在り方、職員の在り方を考えます。若気の至りを時代のうねりにかえましょう! (概ね 20 代の方向け)

分科会内容

<分科会に向けて

~TOKYOワカゾー会の想い~>

TOKYO ワカゾー会は、「児童館」という仕事について、課題や悩み、夢や希望を語り、自分たち、子どもたちにとって児童館を有意義なものにしていこうという、東京都内の「ワカゾー」で組織されています。メンバーは所属も施設規模・職員体制も様々。話を深めていくなかで、自治体や運営形態による違いを超えた本質的な部分で、私たちは児童館でどんなことを大切にしたいのだろうか、という問いが生まれました。



< 今、児童館でハマっている遊びはなんですか? >



児童館で大切にしたい想いと向き合うきっかけとして、 分科会のアイスブレイクでは、参加者を3~4人のグルー プに分け、自分たちが普段もっとも大切にしているであろう 「遊び」の部分について、振り返る問いを参加者に投げ かけました。 なわとび、けん玉、かたき、スポーツ鬼ごっこなど、互いが知っている遊びに共感の声が挙がり、スパイゲームや室内雪遊びなど、地域・施設的特徴がみられた遊び、かたき、ごんべえなど、似た遊びでも名称が違う遊びについて参加者が目を丸くする一幕がありました。

そしてこのアイスブレイクの目的は、参加者同士の交流と地域差などの違いを知ることだけでなく、自分の言葉で、自分が大切にしている遊びを話すことにありました。参加者はなぜこの遊びを選んだのか、なぜ子どもたちに人気なのかを振り返るなかで、自分たちが遊びの中で大切にしている要素について振り返りました。

<下克上というキーワード>



本題に入るに当たり、①自分が大切にしているコトの「見える化」②実現させるためにどうするか考える③自分の力で無理なところは要求する という3つのミッションを参加者に提示しました。日々懸命に仕事と向き合うなかで、実は、私たちワカゾーは自分たちが大切にしていることと向き合いきれていないのかもしれない。だからこそ今日は、あえて大切にしていることを「見える化」し、そのうえで実現させるためにどうするかを本気で考えたい。その際、個人の力ではどうにもならないところについては、周りを巻き込みながら要求し、変えていこうというのが「下克上」であり、今を壊すのではなく、今をより良いものに変えていく発想を大切にするという、分科会全体のコンセプトを参加者で共有しました。



<自分の想いと向き合い、響きあう仲間と出会う>



自分の想いと向き合うために、「20年後、あなたが児童館で大切にしたいことはなんですか」という問いに対し、参加者は思い思いの言葉を白い紙に書き出し、ワールドカフェ方式で複数の参加者たちに想いを話し、想いを聴く活動を行いました。その後、自分の「想い」を胸に掲げ、似たような想いを書いている人、一緒に話したら面白そうな人、あるいは、自分の書いたものを捨ててもいいと思えるほどの「想い」を書いている人とグループを作るよう、参加者に声掛けをしたところ、23人の想いが響き合い、大きく6つの志が生まれました。

< 想いを言葉に、想いをカタチに >



6つの志はそれぞれ、20年後も大切にすることとして、「子どもと向き合う」「実現」「子どもと同じ目線でいる」「子どもに何事にも本気で取り組んでもらいたい」「地域とつながる」「子どもが主役」というキーワードを生みました。その後、自分たちの想いをより具体的にしていくために、それぞれが大切にするキーワードについて、KJ法を用いた分析から「自分たちがすべきこと」「自分たちが要求すること」を探りました。1時間以上かけて行われた活動の中で、参加者は自分たちの想いがどんなベクトルを向いているのか、実現させるためになにができるのか本気で向き合い、数時間前までは顔も名前も知らなかった他人同士が、活動を通して同じ志を支え合う仲間に変わっていきました。

参加者数 23名

参加者の声

参加者は勤続1年の方が最も多く、半数以上の方が勤 続3年以内という結果でした。大会後集約したアンケート を見ると、年齢が近い職員と話をしたかった、他自治体の職員と話したかったなど、交流を求めて参加している方が多かった。参加した感想としては、自分自身ができることをやっていく、気持ちをもって仕事をしていくなど、繋がりから得たエネルギーを基に、今後職場で活躍していきたいという思いが全国から届いています。

担当者から

当初の狙いを達成するには時間的制約が厳しく、参加者の方々にもっとじっくり活動に専念していただく時間、初めてこのようなワークショップに参加する方々への配慮、「下克上」という成果に迫るためのアプローチなどについて、今後に託す課題がある分科会となりました。しかしながら、同世代だからこそ分かち合える悩みや想いについて共有できたこと、全国という単位で、熱い想いを持った若手職員が繋がったことは、今後数年、数十年かけて、確実に一つの成果となって、表れてくると確信しています。全国に蒔かれた、主体的に考え、行動に移すためにどうするかを考えるワカゾーたちによる下克上は、まさにこれから始まります。互いに背中を支え合い、先輩方に助けていただきながら、今後とも想いを大切にして仲間とともに児童館を盛り上げていきたいと思います。

最後に、ワカゾーだけの分科会を企画するという、成 長の機会を下さった、児童健全育成推進財団の方々に厚 く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。



- ●担当 白田好彦(八王子市立元八王子児童館)
- ●協力 TOKYOワカゾー会



■ 分科会 15

こどもの城まるごと体感ツアー

約30年間の国立児童館の蓄積されたプログラムを楽しみながら見学してまわりましょう。

分科会内容

こどもの城の各エリアの活動を見学していただくととも に、それぞれの活動の特徴を説明しました。

施設の概要説明

こどもの城の設立趣旨などとともに、活動の中心にあった、造形・音楽・体育・オーディオ&ビジュアル・プレイの各エリアの活動の特徴について最初に説明させていただきました。

施設見学

上記の5つのエリアに、保育・元小児保健のエリアを加えて見学していただきました。こどもの城館内は来館者で大変混雑していたため十分に見学していただくことができませんでしたが、各活動の様子・雰囲気は感じていただくことができたと思います。

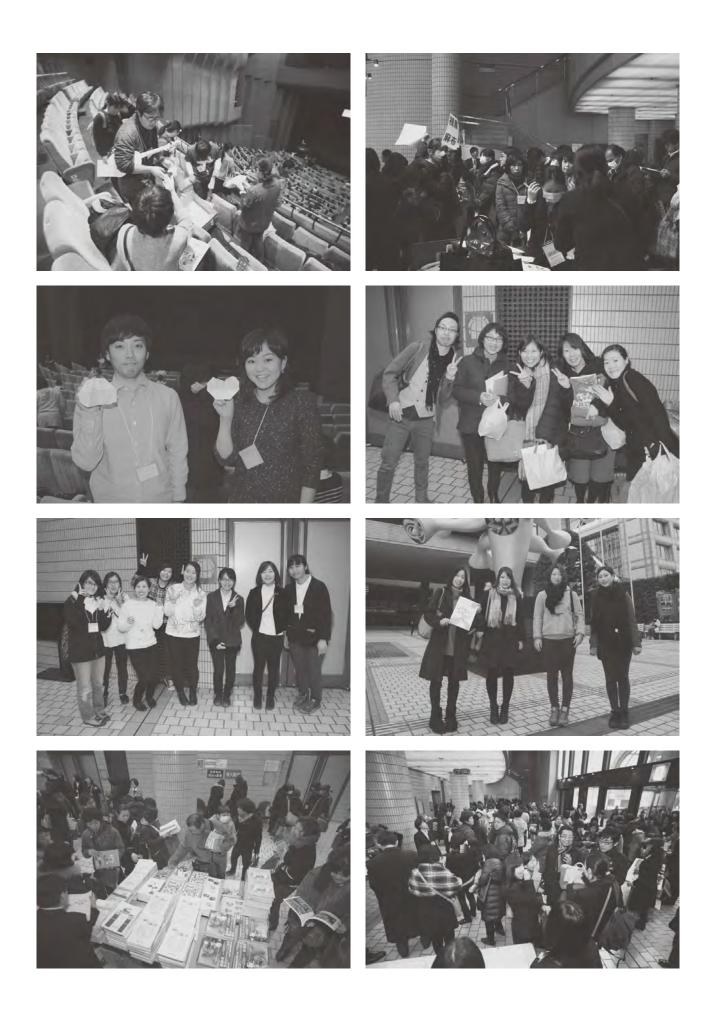
プログラム紹介

各エリアの活動の基本的な考え方を理解していただくため、いくつかのプログラムを実際に体験してもらいました。遊びとさまざまな専門分野をどのようにとらえてプログラムを開発実践してきたのかについてお話させていただいた上で、紙という素材から造形的な活動を考えて構成された「マペット」、2コマのアニメーションを体験できる「くるくるアニメ」、靴下などの身近な素材を活用した劇遊びなどを体験していただきました。プログラムを企画していく際に、何か柱となる題材を決め、系統立てて立案していく方法について紹介させていただきました。

参加者 19 名

●担当 下村 一(公益財団法人児童育成協会)





■ 視察分科会 A

港区麻布子ども中高生プラザ

平成 26 年 9 月に開館したばかりの施設を見学し、意見交換を行いました。 最新施設の見学もさることながら、中高生対応についての熱心な議論が印象的でした。

分科会内容

1. 施設概要説明

施設の規模、職員数等の施設概要と運営の基本となる3つのコンセプトを説明しました。

【麻布子ども中高生プラザ コンセプト】

- ・麻布のまちの由緒ある歴史や国際性豊かな文化を継承し、多 様な個性や自主性を伸ばす施設づくり
- ・子どもの視点を大切にした、子どもの健全育成の拠点となる 施設づくり
- ・子どもが麻布の地域活動と関わりを持つことができ、多様な 価値観・文化・人に出会える施設づくり

2. 見学開始

子どもたちが賑やかに遊ぶ館内を見学。ポイント毎に説明を受け、自由に見学する。中高生の多さ、外国人の多さにびっくりしていました。

3. 事業内容について説明及び質疑応答

見学終了後再び施設の詳しい事業内容について説明を受ける。 「児童施設」「学童クラブ」「こそだてひろば」、それぞれに運営の基本方針と入館者等、運営状況についての説明に続き、運営トピックスとして次の5つのテーマで説明を受けました。

〔オープンしていきなり地域の洗礼〕

地域の大人に向けての理解活動の重要性について説明を受けました。地域における遊び場所が学校に限定され始めている昨今において、児童館が地域から信頼してもらえる遊び場になるために必要な取り組みを考えました。



(予測していたけれどあけてびっくり国際性)

麻布地区の特性である国際性の現状について報告を受けました。国際交流プログラムの本質はお互いに認めあい、尊重しあうこと、それは日本人同士でも一緒ではないか?と提案がありました。

(学童はなんといっても保護者との信頼関係づくり)

保護者との信頼関係を築くための試行錯誤の取り組みについて説明がありました。学童に子どもを預ける保護者の気持ちに寄り添うことの重要性について考えました。

(やっぱりここでもゲーム問題)

ゲームに夢中になる子どもたちとのやりとりやルール決めのプロセスについて報告がありました。各施設での取組も報告しあいながら、子どもの参画の在り方について考えました。

〔じっくり腰を据えて中高生対応〕

オープンして間もない施設として、現在進行中の中高生との信頼関係づくりのプロセスについて報告がありました。中高生活動について先駆的な取り組みをしている施設も多く、事業活性化のための様々な方法が意見交換されました。

担当者から 9月から動きはじめたばかりの施設だからこそ伝えられる苦労話しも含めて、より実践的で、具体的な取り組みを説明できるよう心掛けました。一番白熱した議論が交わされた「中高生対応事業」では、「結局、児童館に来館する中高生たちに、児童厚生員が何を伝えるか、何を支援したいかを明確にすることが大切」と、長年、中高生事業に取り組んできた宮城県の児童厚生員の方が話してくれました。私も含め、日々中高生対応に試行錯誤しているスタッフにとってこの言葉は、核心をついた勇気と元気をもらえる言葉でした。

後日報告を受けたところ、こどもの城に帰った参加者の方々は「帰りに泉谷しげるさんと出会えた!」と大興奮で、施設の印象はまったく話していなかったそうです。麻布地区を満喫していただいた喜びと、泉谷しげるにすべて持って行かれた寂しさで、複雑な心境の担当者でした。

●担当 佐野真一 (港区:麻布子ども中高生プラザ)





視察分科会 B

新宿区立高田馬場第一児童館

高田馬場第一児童館は、平成22年7月中旬より戸塚第三小学校敷地内旧幼稚園舎へ移転いたしました。2階建ての広い児童館内では、学童クラブ事業・戸塚第三小学校放課後子どもひろば事業も行っており、意見交換や施設見学を行いました。



















分科会内容

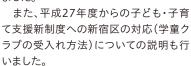
1. 自己紹介

担当者 2 名と 12 名の参加者がお互いに自己紹介

2. 新宿区の紹介

配布資料を使い、新宿区の児童館・学童クラブ・放課後子どもひろばの説明を行いました。

資料の中には、日本語の他、英語・韓国語・中国語・タガログ語・タイ語と6カ国の言語の案内パンフレットもあり、新宿区という地域性も合わせてお伝えしました。







3. 高田馬場第一児童館より

新宿区より指定管理者として運営していることの説明を行いました。

■児童館について

- 1年間の活動報告書(A4両面2枚)をもとに説明。
- ・毎月の恒例行事
- ・乳幼児サークル
- マタニティ講座

■学童クラブについて

- 1年間の活動報告書(A4両面)をもとに説明。
- ・定番イベント
- ・ここが自慢?!特別イベント
- ・児童館と一緒だからこそ

■放課後子どもひろば

- 1年間の活動報告書(A4両面、参加カード)をもとに説明。
- ひろば室では…。
- 校庭では…。
- ・ひろばカップ

4. 施設見学

1階 受付、ひろば室、乳幼児スペース 2部屋、庭 2階 事務所、工作室、集会室、図書スペース、学童クラブ室、ホール

*庭の他に校庭も案内しました。

5. その他・質問

- ○児童館・学童クラブ職員の研修について どのような研修があるのか等
- ○学童クラブと学校の先生との信頼関係の作り方について 学童クラブで今困っていることについての話があり、新宿区 ではどのように学校との信頼関係を作ってきたかを話しまし た。
- ○子ども会議の内容について

児童館なので大人が作るルールやクラブ活動ではなく、子 どもたち自身がやりたい事を募集し会議の中で次年度のクラ ブを決定したり、ホールの使い方 (時間制なのか、早いも の勝ちか)を決定しています。

○職員の採用について 民間事業者なので、運営本部が求人を出して採用を行って います。

○保険について

児童館での事故・怪我の発生の場合には対応できるよう加 入済みです。しかし、中学生まで医療費が免除になってい るため利用しない方もいます。

6. エンディング

「じどうかんへ行こう!」を聴いて、拍手にて終了しました。

参加者の声 全国から来た方々と直接お話しすることができ、様々な状況を知ることができて、勉強になりました。実際に児童館を見学することで、参考になることや問題点などにも気づくことができたのではないかと思います。

担当者から 沖縄から来た方に、新宿の学童クラブについてお話ししたところ、今沖縄で困っていることと同じことが新宿でもあったので、新宿でやったことを今後参考にしてみますという声がありました。どこでも同じような問題を抱えていることがわかって、少し気が楽になったようでした。

●担当 堀越和雄 (子ども総合センター児童館運営係)、志田拓人 (高田馬場第一児童館):新宿区

視察分科会 C

目黒区立緑が丘児童館

児童館未整備地域に専用自動車で移動児童館事業を展開している緑が丘児童館、隣接している認定こども 園、小学校の敷地内にある学童保育クラブの見学と懇談会を行いました。

分科会内容

○参加者の様子

参加者の皆さん【16名】が緑が丘児童館に到着した時には、 目黒区・大田区児童館館長、緑が丘児童館職員が温かくお迎え をしました。初めての場所で初対面ということもあり、すごく緊 張している様子でしたが、目黒区子育て支援課長の挨拶で、皆さ んから笑顔が見られ、笑い声も聞かれすぐになごやかな雰囲気に なりました。

○目黒区・大田区児童館概要説明

リラックスした雰囲気の中、目黒区・大田区児童館概要の説 明を行いました。緑が丘児童館の特徴である児童館未整備地域 に展開する移動児童館事業の説明では、小学校、住区センター、 公園を利用し、乳幼児活動、工作活動、あそびの活動、図書活 動など年間100回を越える事業を紹介すると、児童館内の活動 だけではなく、児童館外の活動の取り組みに皆さんが驚きととも に興味を持たれていました。

○緑が丘児童館見学

図書室、図工室、幼児遊戯室、音楽室、プレイルーム、学童 保育クラブ室、中高生コーナーをゆっくりと見学しました。見学 では各部屋の震災・安全対応、図工室の工具等の安全管理、プ レイルーム倉庫の整理整頓、図書室・音楽室の遊具提供の工夫、 ランドセル来館の取り組みなど、子ども達が安全・安心して楽し く遊べる環境づくりについて重点的に説明をしました。また、子 ども達へきめ細やかに関わる指導員の様子を見ていただき、子ど もへの関わり方で何を大切にしているのか具体的な話しをしなが ら意見交換をしました。皆さんからは各部屋の震災・安全対応、 遊具の提供の工夫、ランドセル来館の取り組みなど、運営の参 考にしたいという声が聞かれました。

○認定こども園見学

緑が丘児童館に隣接する認定こども園【平成25年4月1日開 設】を見学し、副園長から認定こども園の概要について説明をし ていただきました。新たな支援事業である認定こども園にとても 関心を持ち、真剣に説明を聞いていました。副園長のおだやか な説明で、とても良い雰囲気で見学を行うことができました。

○地域散策

緑が丘児童館から自由が丘の住宅街を徒歩で学校内学童保育

クラブへ移動しました。移動中は、閑静な住宅街の話題で持ち 切りで、自由が丘の街の雰囲気を垣間見ていただきました。

○小学校内学童保育クラブ見学・懇談会

学童保育クラブでは、小学校の校長先生も懇談会に参加して いただき、小学校と児童館、学童保育クラブとの連携について話 し合いました。校長先生から児童館、学童保育クラブからも積 極的に学校へ足を運び、関係をつくることが大切であるとアドバ イスをいただきました。皆さんからは連携が難しい、情報共有が できない、なかなか関わりが持てないなど、学校との連携に難し さと課題を見出していました。

アドバイスから、改めて学校との関係の大切さを感じた、自分 達から積極的に関わる必要がある、理解してもらえるように働き かけることが大切であるなど、前向きな感想が出されました。

児童館、学童保育クラブに理解のある校長先生が懇談会を盛 り上げ、全国から参加された皆さんを元気づけてくれました。ま た、皆さんと一緒に食べた自由が丘で有名なスウィーツから元気 をいただきました。

参加者 16名

担当者から 全国から参加される皆さんが、満足していただけ る視察分科会にするにはどうするのか、担当者として当日まで悩 む日々でした。視察は、どこをどのようなポイントに見てもらうい 何を伝えるか、懇談会のテーマは、地域散策のコースは、スウィー ツは、どの店の何を選ぶかなどなど、眠れぬ日が続きました。

視察分科会終了後、自由が丘駅で解散した時、皆さんの素敵 な笑顔が見られ、充実した時間を過ごしていただいたと感じ、不 安や心配は杞憂となりました。

視察分科会に参加していただいた皆さま、また協力していただ いた皆さま、本当にありがとうございました。

最後に、全国の皆さん、機会がありましたら、どうぞ見学にい らしてください。目黒区職員が心から皆様を"おもてなし"いた します。

●担当 石田和子・黒川則子(大田区)、唐牛順一郎・薬師寺 秀幸・大倉毅・今川光広・岡崎望(目黒区)

◎課長あいさつ



◎児童館の概要説明



○小学校内学童保育クラブ目学



◎会場の様子

◎小学校 校長紹介



◎児童館見学



◎学童保育クラブの説明



◎認定こども園見学



◎観談の様子









▮ 視察分科会 D

中央区堀留町児童館

堀留町児童館は、日本橋保健センター等複合施設内の6階・7階にあります。平成27年4月からは、指定管理者による運営が始まり、中高生の居場所としての機能や対応を求められるようになります。学童クラブも併設しており、一体的な運営について意見交換、施設見学をしました。



視察内容

1. 施設の概要、中央区の取り組みの説明

- ・児童館の中高生受け入れは施設面で可能な館から始めます。 「プレディ (全児童)」が全小学校で開始されています。マンションが建ち、人口が増加傾向にあります。昔ながらの下町の繋がりがまだある地域です。
- ・学童クラブの定員は45名。小学生は制服のため、着替えてから遊びます。
- ・4月から指定管理者による運営のため、すでに研修として職員が配置されています。

2. 参加者意見交流

- ・参加者の自治体の状況(学童、児童館)や、学童の4年生以上の受入れ状況、研修の位置づけ、職員体制など、自己紹介と合わせて、質疑応答がありました。
- ・「学童では高学年対応の研修が必要」という要望を受けて実施したという意見がありましたが、堀留町学童クラブでは4~6年生の学童の受入れがあったとしても、児童館として日頃から全体で対応していることもあり、学童職員でも高学年の対応はすでにできているとのことでした。

3. 施設内見学

- ・子育て交流サロン「あかちゃん天国」…広いスペースを乳幼児専用としている取り組みが特徴的でした。床暖房があり、窓が大きくて明るく、おむつ替え台、授乳スペース、パパ向け事業などが充実していまいした。
- ・音楽室…完全防音室で、ピアノ、アンプ・ドラムセットがあり、バンド練習は保護者(父親)がボランティアで指導してくれているとのことでした。当日も、お父さんボランティアが来ていました。
- ・事務室…相談室の利用状況の説明がありました。受付では

荷物の預かりをしているとのことです。複合施設のため緊急 時の館内放送設備やモニターが充実していました。過去にラ ンドセル来館の実績があったとのことでした。その時使用し た棚がありました。

4. あそびに参加

- ・視察に合わせてサークル室にて「メンコ大会」が始まりました。自分でデザインしたメンコを持ち寄って点数を競い合います。視察参加者は「貸メン」で試合をさせてもらいました。中央区内児童館ではどの館でも人気があるとのことです。職員がデザインしたメンコが賞品になります。職員は、競技の審判と得点付けをします。スピード感がとても大事な役割です。低学年でもコツを掴めば強くなれ、学年や男女に関わらず遊べるものとして伝承されてきています。
- ・大学生ボランティアが、かつて自分が使用していたメンコを 大事にしていると、見せてくれたことがあったそうです。

参加者 4名

担当者から

- ・分科会参加者は少なめでしたが、その分、ゆっくりと施設見学 や質疑応答の時間が取れて良かったです。
- ・建物は古いようでしたが、内装が整備されていて、とてもきれいな児童館でした。
- ・事業の内容や、子どもたちの様子からも、下町の雰囲気が残り、 人や町の繋がりが大事にされている地域にある児童館ということ が感じられました。
- ・施設見学中も、参加者同士が質問し合うなど交流ができたと思います。
- ・中央区の担当者からは、中高生対応や指定管理についてなどの 質問がありました。
- ●担当 梶本法子(中央区:堀留町児童館)、二宮良(多摩市: 落合児童館)、内藤裕子(東久留米児童館事業所)









視察分科会 E

世田谷区立上町児童館+桜小新BOP

世田谷区の新BOP事業と児童館との連携をテーマに、 双方の見学と情報交換を行いました。

分科会内容

1. 世田谷区の児童館と新BOPについて

世田谷区立25児童館の具体的な活動内容や特徴などは、毎年度発行している小冊子『元気こども せたがやのじどうかん』でご紹介しました。また、平成25年度の各児童館の利用状況や子育てひろば事業・中高生支援事業等の実施状況の報告をしました。

新BOP事業は、昭和39年開始の学童クラブ事業と平成7年度開始のBOP (Base of Playing=遊びの基地)事業を、平成11年度から統合しスタートした小学校施設を活用した区独自の総合的な放課後対策事業です。平成17年4月から区立小学校全64校で実施しています。実施体制や運営日、施設内容、職員体制、職員配置、児童登録数、予算額等の説明をしました。

参加者からは、新BOPの学童クラブには定員がないが「小1の壁」といわれる待機児に対するそれぞれの対応や悩みが出され、さらに、利用料・保険料・おやつ代・間食のアレルギー対策、保育時間延長に伴う保護者の迎え対応や地域サポーターによるパトロールの例もあがり、参加者同士の情報交換となりました。

2. 桜小新BOPと上町児童館の概要説明と連携事業について

上町児童館布施館長より、それぞれの年間計画、活動報告、参加状況、新BOPのおやつのメニューなど資料をもとに説明していただきました。桜小新BOPの児童指導職員は、上町児童館所属であり、職員会議その他でお互いの情報交換等は密にできていること、また、児童館行事への新BOPの参加や、新BOP事業への児童館の協力・参加、桜小学校おやじの会との協力体制等についてお話ししていただきました。

3. 視察

◇桜小新BOP 小学校の改築とともに新BOP室も新たになり、校内にありながら独立した新BOPの2部屋というつくりで、室内に手洗い場や専用のトイレがあるなど、とても使いやすい仕様になっています。参加者のみなさんは、来所時の学童クラブのロッカーのことやBOPに遊びに来る子の名簿チェック、間食提供用の厨房や間食提供時子どもたちの様子などを指導員の方に質問したりしていました。

◇上町児童館 桜小新BOPから徒歩5分ほどのところにある 上町児童館は、世田谷区立25館の中で一番規模の大きい児童 館です。当日は、庭で「べっこうあめづくり」、2階図書室で「羊 毛のマスコットづくり」、3階のトレーニングルームでは「ローラー スケート」など様々な行事や遊びが展開されていました。ほかに も陶芸室、工作室、音楽室、卓球室、乳幼児専用室の様子を見 学しました。参加者からは、児童館の民間委託や指定管理が進 む中、「廃止」となった実情が語られ、児童館を守るためにはど うしたらいいのかという問題提起がありました。大きな課題です。

参加人数 17名

担当者から 見学をしながら、施設間の移動で歩きながらも、 情報交換が行なわれ、全国各地からの参加者の方々の熱い思い が感じられた視察分科会でした。また、みなさんのそれぞれの児 童館・学童クラブの状況が異なる中、来年度の子ども子育て支援新制度に向けての現場の不安が多く語られたのが印象的でした。もっとたくさん語り合いたかったですね。みなさん、今度はぜひ世田谷線(玉電)に乗ってお出かけください。お待ちしております。

●担当 松井晶子(成城さくら児童館)、川上貴代(野沢児童館): 世田谷区









▋閉会セレモニー

エンディングアクトで登場したのは、品川区の児童館をよく利用する小学生バンド「にゃんころりん」。元気な歌声を聴かせてくれました。そして児童館を過去に利用していた OB/OG グループが合流。全国大会のためにつくってくれたオリジナルソング「じどうかんへ行こう!」を会場と共に熱唱しました。

その後、全国児童厚生員研究協議会から本大会までの経過を改めて確認し、今後の方針を説明しました。

一一児童館・児童クラブを取り巻く環境が大きく変化する中、特に第13回大会(東北復興支援フォーラム:福島)は東日本大震災から復興しようとする現場を応援する意味合いを持って開催しました。そして今大会はこどもの城閉館の報に寄せて児童館

のあり方を再検討する大会となりました。 そして、平成 27 年度から「子ども・子育 て支援新制度」開始となり、現場への影響も大きいことが予測されます。そのため、 ここ数回は、毎年の開催が続いていました が、プレ大会を経て本大会を開催する2年 おきの開催の形に戻すことを決定しました。 全国大会のあり方を考える1年と位置付け、 次回大会への準備を開始します。——

最後に、参加者全員で、全国の子どもたちの健やかな育ちを祈り、また全国の児童館・児童クラブの発展への願いを込めた「KAZE 飛行機」を飛ばし、閉幕しました。

*大会参加者には、日本タッパーウェア株式会社様からお土産として同社製品をいただきました。

「じどうかんへ行こう!」

かをる

翔平

葛西

作詞•作曲 近藤 このまちには みんなが 楽しい場所がある ハ゛ント゛アレンシ゛ 赤ちゃんも子どもも中高生も パパとママだって まちの人も 抱っこして 手をつないで 友だちとつれあって В 毎日でも 久しぶりも はじめましてでも 笑 おう (笑おう) 歌おう (歌おう) みんなが集まる場所がある 笑おう(笑おう)歌おう(歌おう)みんながいると楽しいから

いっしょに いこうよ じどうかんへ

キミが楽しい うれしい さびしい なやんでても きっと 誰かがいる キミ1人じゃなく みんながいる あそんで 語って けんかもしたりして 色んな出逢いがある つながっていく みんな 笑 おう (笑おう) 歌おう (歌おう) みんなが集まる場所がある 笑おう(笑おう)歌おう(歌おう)みんながいると楽しいから いっしょに いこうよ じどうかんへ

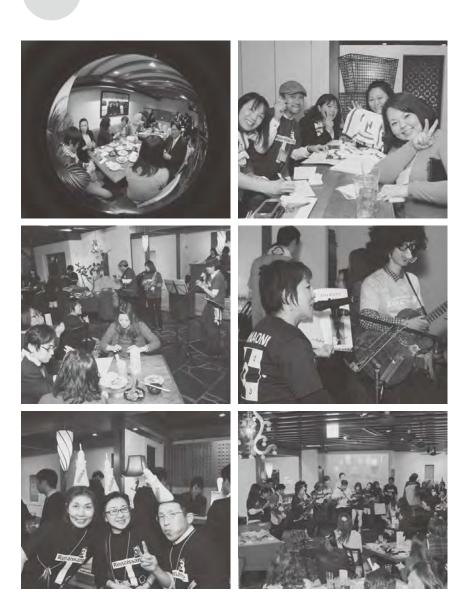
色んな出逢いがある つながっていく みんな 笑 おう (笑おう) 歌おう (歌おう) みんなが集まる場所がある 笑おう (笑おう) 歌おう (歌おう) みんながいると楽しいから いっしょに いこうよ じどうかんへ いっしょに いこうよ じどうかんへ



初めての試みとして、3つの会場で同時開催する方式をとりました。 定員を超えるお申し込みをいただき、各会場共に満員御礼となりました。

久しぶりにお会いした方、初めての方とも交流の輪が広がっていきました。

THE SOUL OF SEOUL(ザ・ソウル・オブ・ソウル)



青山 星のなる木



ACCESO (アチェーゾ)





■ 第2部 児童館・児童クラブフェスタ 遊びの城

東京都内の児童館から選りすぐりの遊びが出展されました。一般来場の子どもたちに楽しんでもらいながら、児童館・児童クラブ職員の相互学習の場となりました。





●特設会場

通常は会議室として使用されているエリアを「遊びの城」として、 遊びを大集合させました。全体をつなぐ仕掛けとして、スタンプ ラリーを開催しました。

*スタンプラリーの景品を、 日本タッパーウェア、シュ ライヒ・ジャパン、マテル・ インターナショナル、バン ダイ、セブン銀行、ホッパー エンターテイメントの各社 に協賛いただきました。あ りがとうございました。



















●ゆるキャラ

各自治体のゆるキャラが登場し、子どもたちとふれあいました。 【参加】りんりんちゃん(板橋区)、あそんじゃ王子(多摩市)、 あら坊・あらみい(荒川区)、たっけー(福生市)、なみのすけ(杉並区)







●東京近郊の中高生たちが企画・運営する 「青春祭」を開催しました。 「青春祭 〜笑顔がつながる Teenager 〜」

イベント実施に向けて、都内近郊の17の児童館の中高生たちは半年の間、延べ7回会議を実施して準備を進めてきました。当日は、青山円形劇場でバンドや演劇のライブ、1Fピロティでは、5つの出店とフラッシュモブなどで大いに盛り上がりました。



●ピロティ

屋外にはテント、ステージを設営し、沿道を歩いている方にも自由に参加していただき、児 童館・放課後児童クラブの取り組みや中高生の活動を紹介しました。

ステージでは、全国の児童 館・児童クラブ職員が有志で 歌やダンス、遊びを提供してく ださりました。

司会:山本博之さん

(港区:麻布子ども中高生プラザ)

























開催までの経過

全国児童館・児童クラブ大会 TOKYO の歴史は、 平成 24 年 9 月からスタートした「東京・児童館月 イチ学習会」(以下、月イチ学習会)の取り組みの 歴史につながります。

月イチ学習会は、4 団体(東京都児童館等連絡協議会、公益財団法人児童育成協会、全国児童厚生員研究協議会、一般財団法人児童健全育成推進財団)が運営委員会を構成し、継続して開催してきました。これまで、平成 27 年 1 月までに 28 回開催しました。

都内には 600 館以上の児童館があり、全国一位 の設置数です。しかし近年、児童館を廃止したり、 その機能を集約したりなど、児童館の動向が大きく 変化してきました。これらの動きに関係者が危機感を強め、情報共有を必要としていたことから、月イチ学習会は始まりました。第1回は呼びかけに賛同した50名以上の職員が集まり、児童館や地域の健全育成活動の現状を憂いながらも、前向きな議論を期待する声があがりました。悔しくもこの翌日に発表されたのは、国立児童館であるこどもの城閉館の報でした。

学習会は、各自治体の児童館の取り組みや方向性を共有することから始めて、輪を広げていきました。ここに現場職員だけではなく、研究者にも参加してもらいながら、議論を深めていきました。







月イチ学習会の様子

その中から、児童館の活動実践による効果や成果を現場で日々実感しているが、それを「客観的に説明できるエビデンス(根拠・証拠)をどう示すことができるか」が重要ではないかという一つの仮説を立てました。児童館ガイドラインなどを材料にして、視点を変えながら幾度も議論を重ねてきました。これを多くの方と考える機会をつくるために、第13回大会東北復興支援フォーラムに分科会「Re:born生まれ変われる児童館 ~そのエビデンス(evidence)を考える」として運営参画しました。子どもたちの意見を元にそのエビデンスを探求していきました。



第 13 回大会

これらの議論を踏まえ、平成 26 年 3 月にはフォーラム「児童館を伸ばすための戦略検討会議」を開催しました。ここにも全国からのゲストを迎え、児童館のあり方、今後の方向性を協議する場を設けました。これを全国大会につなげていこうという機運が高まりました。



フォーラム

平成 26 年度に入り、東京都児童館等連絡協議会との連携の下、実行委員会、企画・運営会議を設置し、ALL TOKYO の形で全国大会の準備をす

すめていく運びとなりました。また、月イチ学習会 を企画・運営のワーキングとして位置づけ、学びの 場と全国大会準備の場としていきました。





企画・運営会議

同年4月から月イチ学習会は、都内の児童館を 訪問して現地で開催する方式に変わりました。これ により、東京都内の児童館の様子をリアルに触れる 機会が増えました。

分科会は、都児童館等連絡協議会の都内ブロックごとで担当したり、自治体単位で担当したり、区・市を越えた有志により担当したり、とさまざまな運営方法をとりました。有志のつながりは、まさに月

イチ学習会から生まれたコラボレーションなのです。 同じ自治体内の児童館で勤務していても、実はな

同じ目治体内の児童館で勤務していても、実はなかなか一緒に仕事をしたり、意見交換する機会が少なくなっています。第2部「遊びの城」の準備などで改めて、職員間のコミュニケーションが活発になったり、技術を若手に伝えるなどの次世代育成の機会になったようです。



平成 26 年度は 児童館現場で 学習会を開催





会場下見



前日作業

平成 27 年度も月イチ学習会は継続して開催することになりました。TOKYO 大会の成果を都内に広げ、そして東京から児童館のパワーを発信していけるよう努力していきます。

これからの道を子どもたちと共に歩んでいきましょう。

東京・児童館月イチ学習会 Facebook ページ https://www.facebook.com/tokyo.tsuki1



企画運営委員名簿

(順不同 所属・肩書きは開催当時のもの)

		(限介円 が底・月音では用性当时ので、
1	堀越 和雄	新宿区・子ども総合センター児童館運営係 係長
2	志田 拓人	新宿区•高田馬場第一児童館 館長
3	川和田優子	荒川区・花の木ひろば館 館長
4	山内 朋子	荒川区・熊の前ひろば館 館長
5	小熊 由紀	台東区•台東児童館 館長
6	鵜澤 一充	文京区•本郷児童館 館長
7	滝澤 由美子	北区・西が丘児童館 館長
8	坂内 八重子	北区・志茂子ども交流館 館長
9	水野かおり	台東区•寿児童館 館長
10	青柳 陸明	台東区・玉姫児童館 館長
11	松井 晶子	世田谷区・成城さくら児童館 館長
12	薬師寺 秀幸	目黒区・緑が丘児童館 館長
13	伊藤 義則	品川区・滝王子児童センター 館長
14	平野 菊江	品川区・東品川児童センター 副館長
15	柳町 祐介	品川区・中原児童センター 館長
16	上地 史人	品川区・ゆたか児童センター 副館長
17	石田 和子	大田区•西蒲田児童館 館長
18	島田 聖子	中野区・上高田児童館 館長
19	鈴木 良東	杉並区•善福寺児童館 館長
20	宮代 哲男	杉並区・児童青少年課事業係 主査
21	安藤 耕司	練馬区・こども家庭部 こども施策企画課
22	竹部 正人	練馬区・上石神井児童館 指導主事
23	佐藤 耕二	板橋区・ゆりの木児童館 館長
24	五十嵐 秀久	墨田区•立花児童館 館長
25	山田 恭平	墨田区・八広はなみずき児童館 館長
26	斉藤 朋行	東久留米市・子育て支援課主査兼中央児童館長
27	内藤 裕子	東久留米児童館事業所 所長
28	荒木 弘	西東京市·新町児童館 館長
29	北村 真	調布市青少年ステーションCAPS
30	中川 洋一	福生市·田園児童館 館長
31	神山 千歳	福生市・熊川児童館 館長
32	二宮 良	多摩市·落合児童館 館長
33	井垣 利朗	八王子市·中野児童館 館長
34	白田 好彦	八王子市•元八王子児童館
35	加賀谷 崇文	秋草学園短期大学 准教授
36	豊倉 厚	鎌倉女子大学 非常勤講師
37	熊澤 桂子	小田原短期大学 非常勤講師

掲載記事

赤文 直 新斤 混

平成27年(2015年)2月23日(月曜日)

館」など、これからの子とも・子育て支援の在り方について考えた。 は1月24、25日に、東京都の国立総合児童センター「子どもの城 遊びについて研究協議を行う、第14回全国児童館・児童クラブ大会 (2月1日閉館)で開かれた。参加者は、児童館への「ランドセル来 全国の児童館や放課後児童クラブの関係者が、子どもの居場所や

|館・児童クラブ大会

校後は寄り道をせずに を認める「ランドセル ラブ(学童保育)待機 児童館に来館すること め、一般的に小学校下 いて考えた。 来館制度」は、児童館 が学校帰りにそのまま の生き残り大作戦?! 時間増加による放課後 セルで児童館~児童館 に何をもたらすかにつ ~」がテーマ。小学生 安全に配慮するた 分科会12は「ランドルを設けている。 びの時間を確保して来 どもたちが放課後、児 児童など潜在的利用ニ 利用者が減っている。 の時間減少で、児童館 ーズもある。 童館でのまとまった遊 一方で、放課後児童ク しかし、近年、授業 そんな状況の中、子 定都市・中核市・東京 ・学校が子どもの居場 度」は、児童館・家庭 「ランドセル来館に関 置している77自治体に 都特別区で児童館を設 を利用できる仕組み。 帰宅せず、直接児童館 提に、下校後に自宅へ 団が昨年8月、政令指 所を把握することを前 児童健全育成推進財 「ランドセル来館制

学童」待機児童の居場所に

範囲では実施」などが みは広がっていると判 あることから、取り組 検索結果では一般市町 あり、インターネット る」「合併前の自治体 で判断し、実施してい での実施が多い様子が

学校から直行

生の利用について、学 多くの児童館では小学 れている。そのため、 帰宅するように指導さ

も可能にするため、

「ランドセル来館制

は6自治体だった。 は15自治体で、検討中

同財団では、調査の

育待機児童などの利用 館者を増やし、学童保

する調査」を行ったと ころ、実施している

校から一度帰宅してか

度」を導入する自治体

「ランドセル来館制度」が児 童館に何をもたらすかにつ いて考えた分科会12の様子



立駒場児童

同区で

実践例を紹介

入れ体制▽保護者との た危機管理対策▽受け

連携一などを検討し

児童館に来館して自宅

指定するリストバンド して確認した後、館で 法を職員と一緒に復唱

できる。他に、学校から 関係性をつくることも

年から導入している目 黒区の橋本栄蔵・子育 ら金曜の放課後から児 参加。同制度を平成19 する児童館の職員らが 導入が決まっていたり 人を検討していたり、 ンドセル来館制度」導 分科会12には、「ラ 校日としている月曜か は、基本的に学校が開とが可能になる。館内 ら6年生。利用可能日 在学の小学校1年生か 在住または区内小学校 利用対象者は、区内 図を提出してもらう。 区で加入している自治 での事故については、 とで、学校の災害共済 この経路で帰宅するこ 給付制度を利用するこ に帰宅するまでの経路 児童の児童館利用と同 などの目印を受け取 り、ランドセルを置く。 その後は、一般来館

て支援課児童館係長と 童館の閉館時間(午後 体賠償責任保険を適用 印を返却し、利用カー ら職員に声を掛けて目 る。帰宅時間になった 行事に参加したりす じで、館内で遊んだり、 ドを持ち帰

委や学校との 宅経路 子面接 図 で保護者 基 連 危 機管理 0 理解

低学年。子

どもの放課

後活動の充

ると、利用

発表によ

る

が多いのは

学校や教委と協議し 的に制度を導入した。 に、学童保育の待機児 るようにするととも 遊びの時間を確保でき が放課後にまとまった 電や入所基準に満たな 所在を明確にする方法 にも対応することを目 し、下校後の子どもの 導入に当たっては、 時的な保護者不在 とで、子どもの特性を 館が制度や子どもに関 ができ、保護者と児童 児童館が理解すること となっている。このこ ると同時に、親子で面 ドを年度初めに提出す 利用する口は、朝に保 項を記入した登録カー ンドセル来館制度」を と学校と情報交換する 6時)となっている。 しての共通理解を深 接を受けることが必須 利用するには必要事 る。帰宅時間や帰宅方 た」ことを職員に伝え、 用カードを持たせる。 利用カードを提出す 必要事項を記入した利 童館に行くよう伝え、 護者が学校から直接児 することができる。 ランドセル来館で来 放課後、子どもは 実際に子どもが「ラ 化だけでなく、児童館 にとって魅力的な場所 や児童館が子どもたち ル米館制度」確立のた になる努力とともに、 めに必要なこととし 機会も増えたという。 めることを挙げた。 教委と学校と連携を深 失 て、保護者の制度理解 そして、 保護者との連携強 ランドセ



第 14 回全国児童館・児童クラブ大会 TOKYO 報告書 平成 27 年 4 月発行

発行: 第14回全国児童館・児童クラブ大会 TOKYO 実行委員会

〒 150-0002 東京都渋谷区渋谷 2-12-15 日本薬学会ビル 7F 一般財団法人児童健全育成推進財団内

TEL: 03-3486-5141

E-mail: jwh@jidoukan.or.jp







子ども虐待防止オレンジリボン運動

